

「豊かさ」に関する意識の変容（1）

—— 1945 年から 1954 年までの「豊かさ」に関する意識の様相 ——

富 貴 島 明

1. はじめに

人間は幸せを求める動物である。日本人にとって、幸せとは追求の対象である。明治 38 年 10 月に出版された、上田敏訳詩集『海潮音』のなかの、カアル・ブッセ「山のあなた」にあるがごとく、幸せは山のあなたの空遠くにあるのだが、ひととめ尋ねゆくものである。幸せは、容易には手に入らないが、それでも切に求め続けるものである。ではその幸せの内容は何であろうか。小学館の『日本国語大事典』によると、「しあわせ」とは、第一に、めぐり合わせ、運命、機会、第二に、幸運であること、またそのさま、第三に、物事のやり方、いきさつである。また、「幸福」とは、恵まれた状態にあって不平を感じないこと、満足できてたのしいこと、めぐりあわせのよいこと、またそのさまである。さいわい、しあわせと同じ意味である。また「ゆたか」とは、第一に、満ち足りていて不足のないさまである。富んでいてゆとりのあるさまである。第二に、広々としてゆとりのあるさまである。第三に、ふっくらとしたさま、豊満で美しいさまである。第四に、他の語について基準・限度を越えて、十分にあるさまである。つまり幸せとは、豊かな状態と言い換えることができるのである。そして特に戦後の日本人は、豊かさを幸福の実体として追求してきた。この豊かさの歴史を研究するのが、本論の目的である。

本論ではまず、『現代のエスプリ——生活意識の変容』341 号のなかの市川孝一「戦後生活史と日本人の生活意識の変容」を中心に、松原隆一郎著『消費資本主義のゆくえ——コンビニから見た日本経済』を参照しながら、戦後の日本人の豊かさの意識がどのように変容していったかを見ていくことにする。（年数の分け方は、本稿では前書を参考にしている。）

1945（昭和 20）年から 1954（昭和 29）年が第 1 期である。この時期の生活意識は、食に向けられていた。戦後復興期の混乱の時代では、食こそが欲望の中心であった。だが 1950（昭和 25）年の朝鮮戦争による特需景気から復興が始まり、景気も上向きになりだすと、欲望の中心が食からファッションに移行した。皆が同じように持つ「アメリカ的生活への憧れ」が機動力として働

くことで、10年間という短期間の間に復興を成し遂げたのである。アメリカ的生活の圧倒的豊かさに驚愕し、その距離を埋めることに豊かさを感じ、それを生活意識にしていたのである。アメリカ人のような「パンとミルクの食事」、ファッション、電化製品を欲望の対象にしていった。

つまり、戦後の混乱期の豊かさ意識は、食料にだけ向けられていた。朝鮮特需による好景気で、食料事情が好転すると、ファッションに向けられたのである。

1955（昭和30）年から1964（昭和39）年が第2期である。日本経済が、アメリカに追いつくための近代化を進め、高度成長をもたらしたのがこの時期である。1960（昭和35）年の池田内閣の所得倍增計画により、国民所得が倍増したのもこの時期である。まず昭和30年代の初めから「三種の神器」などの耐久消費財の急速な普及＝消費革命が実現した。近代産業で働くため、農村から都市へと移動し、都市の団地などに住む人々が、この消費革命をリードしていく主体となった。この時期テレビが普及すると、アメリカのホームドラマも放映され、アメリカ的豊かさを、茶の間で目の当たりで見ることにより、その距離に驚き、憧れを強くしていった。生産技術において欧米を模倣し、消費生活においてもアメリカを模倣したのがこの時期である。

つまり、豊かさ意識は、アメリカの豊かさに追いつき、それを模倣することであった。他人と同じものを持つことで豊かさを感じていた。他人指向の豊かさ意識である。

1965（昭和40）年から1974（昭和49）年が第3期である。1966（昭和41）年から1970（昭和45）年まで続くいざなぎ景気のもと、高度成長がさらに進展した。1968年にはGNPが西ドイツを抜いて世界第2位になり、昭和元禄と呼ばれるような繁栄の時代が実現した。1966年から3Cという新たな耐久消費財の急速な普及＝消費の大型化・高級化が進んだ。しかし高度成長の光の部分が輝いている裏側で、ヤミの部分である公害問題や都市問題が噴出してきたのもこの時期である。1960年代後半から水俣病、イタイイタイ病、四日市喘息などが問題視されるようになった。さらに1971（昭和46）年のドル・ショックによる円高不況、1973（昭和48）年のオイル・ショックが日本を襲った。価値観も、「モーレツからビューティフルへ」、「消費は美德」から「節約は美德」へと転換した。

つまり、アメリカに追いつくという豊かさ意識が充足されたが、公害問題や不況で反省を促された時期でもある。

1975（昭和50）年から1984（昭和59）年までが第4期である。高度成長から減速経済へ移行したのがこの時期である。他の国がスタグフレーションに苦しんでいるなか、日本だけがすばやく立ち直り、少品種大量生産でなく多品種少量生産つまりソフト化・サービス化の経済に移行した。消費生活では、基礎的ニーズはすでに充足されたので、個性的・差別的な消費が求められた。今までの「隣人並みの生活」という他人指向の欲望から逆転して、「隣人とは異なる生活」に向

けだしたのである。このような差異化競争がおこなわれたのがこの時期である。消費者は、差異を追求し、自分を目立たせる、自分をほめあげてくれる商品を求めだしたのである。ナルシズム的消費の時代が始まる。

つまり、豊かさ意識が、今までの他人指向的意識からナルシズム的ミーイズムに代わり、他人との差異＝距離を目指しだしたのがこの時期である。

1985（昭和60）年から現在までが第5期である。1980年代後半からのバブル景気と1991年のバブル崩壊から続く平成不況の時代である。バブル期には、成金おやじ、おやじギャル達が、ブランドブーム・高級品ブームに乗り、浪費に奔走した。持たざる人々まで、瞬間貴族となり、やけくそ消費に走った。しかし1991年にバブルがはじける。雇用不安による将来所得の不確実性、消費を方向付ける社会的信頼の喪失がおこり、時と所で流動するようになった消費者の欲望を対象に結びつけられなくなり、消費が減少した。消費者は、2, 3の、本当の豊かさを感じる対象・こだわる対象には惜しみなく金を使うが、他のものにはただ追随するだけの消費をするだけになった。こだわり消費と追随消費に分かれている。

つまり、豊かさ意識は、バブル期にはナルシズム的浪費のなかで充足されたが、バブル崩壊後は限定されたこだわり部門のみで充足しようとしている。

この分類は、あまりにも単純すぎるのではないか。人間の意識は、現在の自己の感覚、他人の考え、文化や社会環境、さらに過去の記憶と未来の希望などが相互に、多様に関連しながら、一瞬一瞬に形成され、移り変わっていくものである。意識は、相互に関連しながらも、異質な主観の、緩やかなまとまりである。（〈意識〉とは何だろう、下條信輔、182頁参照）特に豊かさに関する意識は、単純に割り切れるものではない。もっと複雑なものである。この複雑な豊かさ意識を、複雑なまま、連続的に表明しなければならない。

また、豊かさを求める意識は、人間の本源的な本質性との関連において考えねばならないが、そのためには豊かさや消費に関する人間的現象の世界を全体的に認識するような人間学を打ち立てねばならないと主張するのが、星野克美氏である。（消費人類学、星野克美、21頁参照）螺旋状に絡まりあう複雑な社会現象の表層にある近代的で明るい面と深層にある非近代的で暗い面を理解するために、共時的・通時的解釈をほどこさねばならないのだ。（同書、70頁参照）

そのためには、戦後からのできるだけ詳しい政治・経済、家計、健康、教育、宗教、文化（若者文化）・レジャー、社会・交通、衣・食・住、ファッション、流行歌、ベストセラーの本、マンガ、日本人の自己意識（日本人論）などの社会現象や様相を列挙する必要がある。参照した本は、下川耿史・家庭総合研究会編『昭和・平成家庭史年表 1926—1995』、Media View編著『1946—1999 売れたモノアルバム（Playback Memories）』などである。これらの書物を参考にとすることで、豊かさに関する意識の変遷を見ていくこととする。

本稿では、1945（昭和20）年から1954（昭和29）年までの第1期の豊かさに関する意識を研究する。まず最初に、1945年の政治・経済、家計・健康・教育、宗教、文化（若者文化）・レジャー、社会、交通などに関する現象が日付順に列挙される。（レジャーの現象は、次の時期に大型化し、特に重要な項目となる。しかし経済的豊かさがレジャーを生むわけだから、本稿では政経、その他の項目に入れておく。）第二に、食料に関する現象が日付順に列挙される。第三が住宅、第四がファッションや化粧に関する現象が日付順に列挙される。第五が流行歌の音楽界、第六がベストセラーの本やマンガ、日本人論の本に関して、思想界として紹介される。（絡み合う複雑な現象をなるべくわかりやすく解きほぐすために、各現象を日付順に列挙してある。関連のある現象は、日付を繰り上げて列挙している。）その後1945年1年間のまとめがなされる。この作業を1954年まで続け、最後に、10年間の豊かさ意識をまとめてみる。

2. 1945（昭和20）年

（1）政経、その他

8月15日のいわゆる玉音放送である『終戦の詔書』の「堪エ難キオ堪エ忍ビ難キオ忍ビ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ平カムト欲ス」という（終戦の詔書、文芸春秋編、大原泰男監修、11頁）から日本の戦後が始まる。焼け跡の中からの復興の始まりである。8月20日、灯火管制が解除される。9月2日、ミズリー号上で降伏文書の調印がおこなわれ、連合国最高司令官総司令部（GHQ）が設置された。9月11日、東条英機以下39人の戦争容疑者が逮捕される。9月20日、文部省が、戦時教材の省略・削除など、教科書の取り扱いに関する通達をする。「黒塗り教科書」の登場である。10月11日、GHQが五大改革（選挙権付与による日本女性の解放、労働組合結成の促進、自由主義的教育をおこなうための諸学校の開放、秘密の検察およびその濫用が国民をたえざる恐怖にさらした諸制度の廃止、経済機構の民主化）を指示する。臨時軍事費の捨て鉢な放出で始まった臨軍インフレのなか、9月18日、財界の総意を結集して、経済団体連合委員会が発足した。9月25日、GHQが月産1,500台のトラック製造を許可する。10月29日、戦後復興の資金調達のために、第1回宝くじが発売される。1枚10円で、1等が10万円。当時の標準家庭の1ヶ月の生計費は約1,300円の時代である。副賞純綿金巾。空くじは4枚でたばこ10本と交換できた。1842年の天保の改革で禁止されて以来のくじである。11月、GHQが三井、三菱、住友、安田の4大財閥本社の解体を指令した。11月16日、東京の国技館で大相撲が復活した。栈敷席が高額すぎるので、人々は実況中継に熱中した。戦後初のスポーツ中継である。11月23日、神宮球場でプロ野球も復活した。戦後の日本人は、もう空襲はないという安堵感と、目標喪失に伴う虚脱感、急激な改革のもたらす混乱感の入り交じった生活感情から出発した。

（2）食 料

この時の生活目標は、「いかに食べていくか」であった。とくに都市の住民にとって食料難は深刻であった。終戦直後の一般市民の規定主食配給量は、1日一人分で2合1勺（297g）、一食につき軽くよそって茶碗1杯分（1日一人3合、一食につき茶碗2杯で充分といわれていた）にしかならず、しかもその配給量も実現できない状態が続いた。さらに全国平均で10日ぐらいの遅配がたびたび起こった。10月、東京の上野駅における餓死者は1日平均2.5人であった。大阪では8月60人、9月67人、10月69人であった。10月26日に日本政府は、食料435万トンの輸入をGHQに要請した。穀物300万トン、砂糖100万トン、コブラ30万トン、ヤシ油5万トンであった。GHQは、その必要を認め米政府に輸入を要請したが、9月22日の「初期対日方針」で、日本国民の苦境は日本国の責任であるとして拒否された。（1946年、たび重なる要請で70万トンが輸入された。）11月1日に、東京の日比谷公園で餓死対策国民大会が開かれ、米3合の配給を要求した。ヤミ市が氾濫した。ヤミ市や田舎で、手持ちの晴れ着やコートなどを食料と交換するタケノコ生活をしていた。特にこの年の凶作は、大正・昭和期最大のものであり、食料危機は深刻であった。米の実収高は39,178,000石、前年比33.1%減であった。政府は、総合供出制をしき、屑米、麦、雑穀、甘藷、馬鈴薯等を換算した収穫予想高を5,000万石とし、3,000万石の供出額を予定したが、減収のため2,656万に減額した。しかしそれすら実現できなかった。（その原因の一つは、敗戦による農民の供出意欲と義務感の喪失、ヤミに流す利ざや稼ぎの欲望であった。この年だけで全国で約400石の米が、ヤミに流れたといわれている。昭和の歴史⑧、神田文人、157頁参照）11月17日の閣議で、供出価格を1石92円50銭から150円に引き上げ、肥料、農具、衣料等の特配品を支給するなど確保策を実施したが、1946（昭和21）年1月10日現在で、28.1%の達成率にしか達しなかった。供出実績は予定量の23%しかならず、水産漁獲量の182万トンも昭和期最低額であった。9月1日から学校の授業が再開されたが、弁当をもっていけない児童が続出し、午後の授業が中止になるほどであった。都市の市民は買い出しに奔走した。警察庁経済警察部によれば、武蔵野（現西武）、東上、京成、東武、省線（後の国鉄）各線での買い出しは、9月20日には1万8千人、10月下旬には18万人、11月2日、3日ごときは100万人であったという。

（3）住 宅

大都市圏の住宅問題も深刻であった。8月28日、政府は、住宅300万戸建設5ヶ年計画を発表した。9月2日、大陸からの第1回引揚げ者7,000人が、山口の仙崎港に上陸した。以後引揚げ者は続々上陸し、住宅不足を加速することになる。10月、学童が集団疎開から帰ってきた。

内地の陸海軍部隊の復員も完了した。住宅不足は全国で420万戸であった。11月1日の東京都の人口は348万人・約60万世帯でそのうち約30万人・93,000世帯が家でなく、壕舎（戦時中に庭の隅や道ばたに穴を掘った半地下の防空壕）約3万戸やバラック約26,000戸で生活していた。年末には、バス住宅や汽車住宅も出現した。この年にプレハブ住宅が誕生した。

（4）ファッション

手持ちの晴れ着、袴、コートなどを田舎やヤミ市で食料に代えるタケノコ生活が一般におこなわれていた。10月頃、柳屋ポマード（柳家は、東京空襲を予想して地面の下に香料や原料を保存しておいた）、花王クリーム、ケンシポマード、パピリオクリームが製造された。極度の品不足であった。秋には、落下傘の紐を使ったグリーンベルトが市販された。来日したアメリカの女性をまねて、戦時中に禁止されていた口紅の化粧が盛んになる。ネックレス、ブローチ、ブレスレットなども普及する。リボンや造花、ヘアネットなどの安くて小さなものが飛ぶように売れた。戦後のおしゃれの始まりである。資生堂が戦後初めての多色刷りの化粧品ポスターを製作した。モデルは人気絶頂の原節子であった。宣伝業界に旋風を引き起こした。（化粧品のブランド史、水尾順一、111頁参照）

（5）音楽

10月11日、GHQ検閲による戦後初の映画『そよ風』が封切りされた。並木路子による主題歌『リンゴの唄』が大ヒットした。ものがない時代にもかかわらず約30万枚ものレコードの売り上げを記録したという。当時の人々は、彼女の明るいマスクと歌声に、一筋の希望の光を見いだしたのである。12月31日、NHKが「紅白音楽試合」を放送する。GHQから「試合はまかりならん」としてクレームがでる。のち「紅白歌合戦」と変更する。

（6）本

8月30日、『日米会話手帳』が発行された。年末までの3ヶ月半で360万部を売り上げ、大ベストセラーとなった。（NHKの「英語会話」が始まるのは翌年2月からである。）アメリカへの関心、アメリカの豊かさへの憧れが、ベストセラーにしたのである。『文芸春秋』、『文芸』、『文学』などが復刊された。女性向けオピニオン誌の創刊ラッシュの年であった。9月から10月にかけて、新興女性誌といわれる『女性と文化』、『婦人有権者』、『婦人文庫』、『工場と家庭』、『婦人』、『婦人世界』、『婦人生活』などが創刊された。1945年から1951（昭和26）年の間に、女性誌158誌が創刊された。12月の総選挙で、女性議員39人が誕生し、1947（昭和22）年3月に、男女共学が実現するなど、女性の地位が飛躍的に上昇した時期に、女性の発言の場として、重要

な役割を果たしたのである。

（7）まとめ

戦争が終わったという安堵感と、目標喪失・価値逆転という虚無感のなかで、豊かさ意識は、餓死しないための食料に向けられた。飢え死にしないために、衣服を食料に代えることで、食に関する豊かさがかろうじて充足された。同時に特に都市部の住宅も欲望の対象であった。飢え死にしない、凍死しないという、最低限の生きるだけの豊かさを求めていたのがこの時代である。しかし新たな目標として浮かび上がってきたのがアメリカの豊かな生活である。戦時中の「贅沢は敵だ」というスローガンはきかれなくなった。しかし贅沢は夢の夢。だがその憧れから、人々は『日米会話手帳』を購入し、銀座のPX（占領軍販売所）のショーウィンドーの目映いばかりの輝きに見とれ、アメリカ女性をまねて口紅をぬり、ネックレスを身につけたのである。小さくて安い小物からおしゃれをはじめたのである。希望を持って、明るく『リンゴの唄』を歌ったのである。相撲の中継に苦しみを忘れたのである。年末には「福笑い」で笑いをとったのである。

3. 1946（昭和 21）年

（1）政経、その他

元旦におこなわれた昭和天皇の「年頭の詔書」のなかで天皇は、人間宣言とともに、「大小都市ノ蒙リタル戦禍、罹災者ノ艱苦、産業ノ停顿、食糧ノ不足、失業者増加ノ趨勢等ハ眞ニ心を痛マシムルモノアリ。……然レドモ朕ハ爾等國民と共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分タント欲ス。」と、利害と喜び、悲しみを国民とともに共有することを発表し、国民の心を奮い起こすよう、ラジオ放送で訴えた。1月4日、GHQは、軍国主義者の公職追放を指令した。2月17日、金融緊急措置令、日銀券預入令、臨時財産調査令が施行された。急激なインフレを抑えるための新円切替がおこなわれたのである。預金の封鎖、流通中の日銀券の3月2日限りの通用廃止、払戻額は1ヶ月につき世帯主300円、家族1人につき100円に限り新円と交換でき、それ以上は封鎖預金とされた。勤労者の給与も新円で支払われるのは500円限りであった。500円の耐乏生活といわれていた。3月の東京のヤミ米は1升67円の時代だから、この生活は苦しかった。（昭和経済史、有沢広己監修、276頁参照）日銀券の発行高は、2月18日の618億円から、3月末の233億円の激減した。しかし9月末には644億円に増加した。インフレは収まらなかった。東京卸売り物価指数1934～36年を100とすると、1945年8月336.0、1945年12月674.8、1946年6月1632.3、1946年10月19999.0であった。4月1日、発動機製造（現在のダイハツ工業）が小型三輪車「ダイハツSE型」の製造を開始する。以後、小型三輪車の新規メーカーが続々と登場

する。4月3日、戦後の経済復興を若い経営者が実現するのだという自負と情熱を抱いて結集されたのが経済同友会である。4月10日、戦後第1回の総選挙がおこなわれた。幣原内閣が成立した。4月20日、政府は持株会社整理委員会令を公布し、新たに浅野、中島、古河、大倉、鮎川など合計23の財閥本社の解体をした。4月27日、プロ野球公式試合が再開された。赤バット、青バットに興奮した。4月、ミノルタカメラが戦後初のカメラ「ミノルタセミⅢ型」の生産を開始した。精機光学工業（現在のキヤノン）もこの年に「キヤノンSⅡ型」を生産する。（日本光学（現在のニコン）が「ニコンⅠ型」を発売するのは1948（昭和23）年4月のことである。）5月3日、極東国際軍事裁判が始まる。8月15日、夏の甲子園大会が復活した。8月16日、経済団体連合会（経団連）が創立される。9月、労働関係調整法が公布される。前年12月公布の労働組合法、翌年4月公布の労働基準法の労働三法が制定され、労働者の発言力が高まった。労働争議が多発することになる。10月11日、第2次農地改革がおこなわれる。全納地の約45%、230万町歩（小作地の80%）を土地所有者から買い上げることによる地主制度の根本的解体と、食料供出を確保するためにおこなわれた。10月、本田技術研究所（現在の本田技研）が創設された。自転車にエンジンをつけたポンポンオートバイが生まれる。10月、戦時補償特別措置法、企業再建整備法、金融再建整備法が成立した。これらの戦時補償打ち切り政策により、当局者は、経済復興を急がねば経済全体が崩壊してしまうという危機感が高まった。その危機感が、石炭と鉄鋼の生産に全力を集中する傾斜生産方式を生んだのである。11月3日、日本国憲法が公布される。（翌年5月3日施行される。）前年の12月に宗教法人令が施行され、他の神道教派や仏教宗派の支部教会という形式をとらねばならなかった新宗教団体が、独立の宗教法人となるのが容易になった。そのため1月創価学会、2月愛善苑、9月PL教団が開教され、「神々のラッシュアワー」と呼ばれる現象が起こった。現在の不幸を神により救われ、将来の幸福を神により与えられることを望んで、信徒になったのである。自動車の生産が再開され、年末までに全国で165,000台が生産された。「空いているものは腹と米びつ。空いていないのは乗り物と住宅」という言葉が流行した。

（2）食料

1月17日には、農林省が、主食強制買い上げ、生鮮食品の再統制など、食料管理強化に関する緊急勅令案を決定した。1月22日、東京の板橋の造兵廠跡で、大量の隠匿物資が摘発された。2月から食料の遅配が始まった。2月17日、食料緊急措置令を発して、強制供出制度を確立した。3月3日には、物価統制令を発布して、供出価格を150kg当たり300円に倍増した。消費者物価は350円であった。（この年、供出額は2,044石弱、目標の76.9%にとどまった。）だが、5月6日の時点で遅配の最高12日、平均5.1日であった。最悪の北海道では、1ヶ月以上の遅配114市

町村、2ヶ月以上は36町村におよんだ。最高は、広尾村の104日であった。6月には、東京都内の遅配が、平均18.9日であった。春、京浜地方の餓死者は1,300人に達した。4月26日に発表された失業者は、潜在失業者も含めて600万人、完全失業者は159万人であった。5月19日、11年ぶりにおこなわれた「食料メーデー」には、25万人もの参加者があった。「朕はタラフク食ってるゾ。汝、人民飢えて死ね」というプラカードが登場した。それに対して最後の不敬罪が適応され、逮捕された。この頃のヤミ値は、マル公の30～40倍であった。警視庁発表では、米1升53銭が70円、砂糖1貫目3円79銭が1,000円であった。ヤミ購入依存75%、タケノコ依存20%というのが、平均した都市家計のバランスシートであった。（昭和経済史、258頁参照）1946年6月に発表された全国勤労者（労務者・給料生活者の標準5人家族343家族対象）の生活費調査では、1ヶ月の平均実収504円40銭、支出844円80銭、差し引き340円40銭の赤字であった。官吏の基本給は、7月から600円に増額された時代であった。1946（昭和21）年から1947（昭和22）年のエンゲル係数は、73～63%という高い数値を示していた。12月に大蔵省が発表した生活費の内訳は、生計費の70%が飲食費で、1人当たり摂取量1,380 cal、サラリーマン平均1,990 calであった。2,180 calを必要としていたのにである。食料と衣料費の割合は14対1、1947年は10対1、1948年は5対1になった。（昭和経済史、180頁参照）今年度産米の供出割り当て達成率が58.2%で越年した。全国でのヤミ米量は、約400万石であったといわれている。5月30日、警視庁は、警官500人を繰り出して上野広小路のヤミ市場を抜き打ちに包囲し、禁制品を押収した。押収品はトラックに10数台分あり、ゴム靴、石鹼、生地などであった。軍需工場関係者の旧軍人がヤミ商人と共謀して工場の倉庫から横流しした貯蔵品である。（昭和生計なつかし図鑑、太陽編集部編、69頁参照）6月、官民合同の隠匿食料供出促進委員会を、都道府県に設置した。6月6日、農林省は、1ヶ月に10日間の食料休暇を決定した。休暇を与えて、食料の買い出しにいかねば、飢え死にになってしまうからである。8月6日、GHQが、南氷洋捕鯨の出漁を許可する。11月7日日水船団、11月22日大洋船団が出航する。鯨の肉が食卓にのぼることになる。11月1日、主食の配給が2合5勺、妊婦には5勺の増配になった。12月12日、ガリオア資金による小学校給食が開始された。食うや食わずの生活である。6月3日に始まったNHKの『街頭録音』（インタビュー）番組の最初のタイトルは、「あなたはどのように食べていますか」であった。食料調達を餌に婦女暴行殺害を重ねていた小平義男が逮捕されたのは、8月20日であった。この時期には食がらみの事件やエピソードが多かった。食こそが人々の欲望の中心であり、食べていけることが幸福であり、食料があることが豊かさであった。

（3）住 宅

3月20日、日本交通公社が、東京駅の乗車口と丸ビルを結ぶ地下道に簡易ホテルをつくり、

一般旅客に開放した。3月、6.25坪の越冬住宅が、大都市中心に10万戸完成した。5月31日、余裕住宅の強制解放措置が始まった。8月20日、住まいのない引き揚げ者400余人が、東京の麹町小学校ほか3小学校を占拠した。11月、住宅営団が、東京都小平市と埼玉県川口市で、菜園付き住宅141戸を発売した。土地200坪、建坪12坪であったが、屋根はルーフィング、板壁は節穴だらけで、廊下も板がうねっていた。

（4）ファッション

3月、デザイナーの伊東茂平が、戦後初のスタイルブックを刊行する。6月、横浜で戦後初のファッションショーが、占領軍将校の夫人たちにより開催された。日本人はオフリミットであった。日本人にとり、垂涎的が、アメリカン・ファッションであった。秋に、男性用ズボンを女性用の脇開きに改良したスラックスが流行した。9月に文化服装学院が再開され、『装苑』も復刊された。ドレスメーカー女学院もこの年に再開された。定員1,000人の10倍近い申し込みであった。衣服への憧れは強く存在していた。肩パットが流行したのもこの年であった。米軍婦人士官の制服をまねたのである。パーマメントも復活している。資生堂から戦後初の化粧品、爪紅（ネイルスティック）が発売された。

（5）音楽

『リンゴの唄』が焼け跡に流れている。5月23日、『はたちの青春』が封切りになる。日本初の接吻シーンで話題を集めた。6月、『東京の花売り娘』がリリースされ、大ヒットした。そのため、銀座の街角には花売り娘が大勢立つようになり、銀座名物になった。（4年後にまた花売り娘が急増した。）

（6）本

森正蔵著『旋風二十年』がこの年と翌年のベストセラーであった。上・下巻で80万部も売り上げた。一般国民に知らされていなかった敗戦に至るまでの事実を暴露したものである。軍部の情報操作に怒りをもって人々が買い求めたのである。1946年にオランダで出版され、1930年に翻訳されたが即座に発禁となったV.D.ヴェルデ著『完全なる結婚』が、改めて刊行され、広く読まれた。様々な性の入門書の先駆けとなり、性革命を引き起こした。（20世紀——どんな時代だったのか——ライフスタイル・産業経済編、読売新聞社編、40頁参照）坂口安吾が2月の『新潮』で「墮落論」、12月の『文学季刊二号』で「続墮落論」を書いた。（翌年『墮落論』としてまとめられた。）正しく墮ちる道を墮ちきり、古い日本を捨て去り、そのうえで新しい日本に生まれ変わることだけが、今の日本に唯一残された方法であると、主張した。戦前の日本文

化の否定から、戦後の新文化の創造を主張したのである。志賀直哉も、4月の『改造』「国語問題」のなかで、日本語を否定し、世界で最も美しいフランス語を国語として採用することを主張した。この年、子供向けのマンガ雑誌が100誌以上出版された。アメリカ文化を意識した『コマ漫画』、『ハロー・マンガ』、『少年』、『少年倶楽部』などである。子供に明るい夢をあたえ、清く正しく育て欲しいという大人の願いと、子供の欲求に答えて売上げを伸ばそうとする商業主義の結合が、第1次マンガブームを引き起こしたのである。同時に、にわか業者による、粗雑な造本の「赤本マンガ」も多数出版され、その通俗的内容に批判が集中した。不良文化であるとして非難されたのは、翌年に出版された手塚治の『新宝島』、山川惣治の『少年王者』などである。（戦後マンガ50年史、竹内オサム、17頁参照）

（7）まとめ

極東国際軍事裁判も始まり、過去の清算がおこなわれようとしていた。農地改革、財閥解体、労働と教育の民主化がおこなわれ、近代化、民主化が進みだした。経済同友会、経団連が設立され、傾斜生産方式がとられ、復興に向けて歩みだした。このような政治・経済・教育の大変革がおこなわれ、錯綜とした雰囲気の中、激しいインフレに苦しみながらも、人々はまず食料に豊かさの意識を集中していった。ヤミ市場とタケノコ生活に依存して飢え死にしないですんだのである。住宅不足も改善されず、欲望の対象であった。節穴だらけでゆがんだ家でも、住めば天国であった。食料も住宅も不足しているなかでも、ファッションへの憧れ、豊かさを意識は存在していた。スタイルブックを参考に、縫い直しをした洋服でかろうじて豊かさを実現させていた。アメリカ婦人をまねた服装や化粧を目指していた。宗教に豊かさを見いだそうとする人も多くいた。マンガもアメリカマンガを真似たものが出版されている。本も、戦争の真実を暴露した本が売れた。今までの日本文化を徹底的に反省し、欧米文化を模倣することをしなければいけない、という雰囲気が広がった年である。そして自動車やカメラ、時計の生産も始まった。本田宗一郎がポンポンオートバイを作り始めた。後の経済を引っ張る部門が産声を上げている。

4. 1947（昭和22）年

（1）政経、その他

1月24日、復興金融金庫が設立される。この年の貸付額は535億円、翌年は725億円の貸付を実行している。傾斜生産方式にもとづき、主に石炭、電力、肥料、鉄鋼などの重点産業に貸付が集中している。それが復金インフレを引き起こした。2月1日、二・一ストがGHQの指令により中止になる。GHQは、労働運動に対する姿勢を「助成」から「牽制」へと切りかえたので

ある。インフレに追いつかない賃金上昇、失業の深刻化に対して、労働者は、生産管理闘争をおこなっていたが、前年の国鉄 75,000 人、海員 60,000 人の首切りに対する反対闘争のおこなわれた 9 月頃からゼネスト戦術が練られてきた。二・一スト以後、全労連という労働戦線の統一組織が結成されたが、やがて民同派の分裂を生み、労働組合運動は厳しい時代を迎える。3 月 10 日、第 1 回東京都復興宝くじが発売になる。5 月 10 日には政府が第 7 回宝くじを 1 枚 20 円で発売する。以後、七福くじ、鳩くじなど続々発売になる。12 月 1 日には日本勧業銀行が 100 万円の宝くじを発売し、この年の 10 大ニュースの 1 つとなる。人々は宝くじに夢を託したのである。3 月 31 日、教育基本法、学校教育法が施行された。6・3・3 制が発足した。4 月 7 日、労働基準法が制定された。（9 月 1 日に施行された。）8 時間労働、男女同一労働同一賃金などが規定された。4 月 14 日、独占禁止法が公布された。（7 月 20 日全面施行）4 月 25 日、戦後 2 回目の総選挙で、社会党が勝ち、最初の社会党首班の片山内閣が誕生した。5 月 19 日、「経営者よ、強かれ」と主張する経営者団体連合会が発足する。（翌年に日本経営者団体連合会と改称する。）6 月 3 日、GHQ は、日本全体で年に 300 台の 1,500 cc 以下の小型乗用車の生産を許可した。小型自動車は、アメリカであまり製造されていないので、アメリカと対抗するためには、小型自動車しかなかったのである。トヨタ自動車のストック部品による普通乗用車 50 台の組立も許可した。戦後初の乗用車生産であった。10 月には、「トヨペット SA 型」の生産が開始された。（トヨタ自動車 20 年史、トヨタ自動車工業株式会社社史編集委員会編、265 頁参照）11 月 27 日、日産重工業（現在の日産自動車）が、4 人乗り 700 cc の「ダットサン・スタンダード・セダン」を発売する。16 万円であった。7 月末には「公定物価体系」を完成させ、インフレ抑制と傾斜生産方式を推進した。この年の終期には、これまで遅れていた生産財生産が消費財生産とほぼ均衡を保てるまで回復した。（この年は、アメリカの援助物資額も、前年の 3 倍に増加した。）7 月 3 日、GHQ が三井物産、三菱商事の解体を指令する。8 月 9 日、古橋広之進が、全日本選手権水上競技大会 400 m 自由型で世界新記録を樹立した。以後 2 年間に 23 回の世界記録を樹立する。「フジヤマノトビウオ」と称され、復興期日本に大きな期待をもたらした。8 月 15 日の終戦 2 周年にあたり、制限付きながら民間貿易の再開が GHQ から許可された。輸出品にはすべて、「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」と入れさせられた。12 月 12 日、児童福祉法が成立した。東京都では、毎日 1 人の捨て子があった。児童の福祉が社会の責任となった。12 月 22 日、民法が改正された。明治民法下での「家」制度が廃止され、近代的家族像が示される。結婚および離婚の自由と平等確保、財産の均等相続など個人の尊厳、男女の本質的平等もうたわれた。戦後日本の高度成長を支える性別役割分業家族を生み出した。（家族データブック、久武綾子・戎能民江・若尾典子・吉田あけみ著、9 頁参照）12 月、過度経済力集中排除法が施行された。財閥の復活を徹底的に押さえつけた。しかし米ソ対立の激化とともにゆるめられていくこととなる。

（2）食 料

1月20日、小学校でララ（極東救済委員会）物資による給食（副食のみ）が再開された。主食は各自持参だったが、手ぶらの子供が多かった。2月、東京都内の米の遅配は11日。3月5日、GHQが政府に供米の強権発動を指令し、それを受けて内務省が各県に供米の強権発動を通達した。しかし6月、東京では13.2日、名古屋では9.7日、大阪では7.1日の遅配であった。3月、生活苦での子供の家出が増大した。7月には主食遅配の全国平均は20日になった。4月、ロッテがガムの製造を開始した。原料は松ヤニとビニールとサッカリンであった。12月、森永製菓が「ココアキャラメル」を生産した。甘味に飢えていた人々は争って購入した。8月12日、皇居前広場で食料確保国民大会が開かれた。9月1日、パンの切符割当制が実地された。9月、本年度米・甘藷の供出割り当て（個別割り当て方式）が難航し、GHQは供出量の確保に強硬手段をとることを指示した。割り当て方式変更のきっかけになった。10月1日、果実が自由販売になる。酒類は12月1日になる。10月11日、東京地裁の山口良忠判事（37歳）がヤミを拒否し、配給食料だけで生活したために、餓死した。「死んでも闇は食べません」が、この年の大流行語であった。11月、農林次官が主食の遅配分は打ち切ると声明を発表した。東京商工会議所の調べでは、白米のヤミ値（1升）は、1月60円、2月70円、3月80円、4月90円、5月110円、6月120円、7月190円、8月140円、9月155円、10月180円、11月160円、12月180円であった。1年で3倍の上昇率であった。10月に警察庁から発表されたサラリーマンの生活実態調査によると、平均月収3,542円、赤字1,580円で、全生活費の75%がヤミ買いであった。米不足を補うためのパン食普及のために、7大都市の各家庭にベーキングパウダー200グラムを配給した。余材のジュラルミンでつくった文化天火や電極式パン焼き器でパンを焼いて食べたのである。昭和生産が魚肉ハムを開発した。食への欲望は充足されていない。

（3）住 宅

2月8日、臨時建築等制限規則が定められ、12坪以上（併用住宅は15坪）の住宅の新築および増改築が禁止された。7月19日、東京の三多摩厚生会などの引揚げ者団体が、住宅を要求して、国分寺の旧陸軍技術研究所を実力占拠した。8月5日、東京で住宅獲得同盟が結成され、皇居前広場で住宅獲得国民大会を開催した。8月28日、第1回都営住宅の抽選がおこなわれた。倍率は164倍であった。12月22日、1都13市への転入が禁止された。（翌年の12月31日まで）

（4）ファッション

1月、リーゼント、電気パーマの流行が始まる。街には、モンペ姿に代わりスカート姿も多く

見られるようになった。それは7月、東京都で家庭内職用ミシンの貸し出しを始めたことと、スタイルブックなどが裁断図を掲載するようになったこと、消しがたいおしゃれ願望により、着物を洋服に、モンペをスカートに更生することが流行したからである。更生服全盛の時代であった。10月1日、衣料の切符制が復活した。12月、大阪の三越で、10大メーカーによる化粧品大会が開かれた。12月、日本美容師会が設立される。理容業界で徒弟制度が廃止されたからである。美容コンクールも開かれた。山野愛子が新日本髪を発案したのがこの年である。ヒールの高さが5 cm のアメリカン・ヒール、幅 30 cm のレザーベルトが流行した。

(5) 音 楽

「こんな女に誰がした」という暗い恨み節の『星の流れに』が大流行する。日本中が、自分のこととして、主人公の娼婦（全国で15万人いたといわれている）のやるせない運命に共感したのである。日本に残された自然の美しさを、近江俊郎が歌い上げた『山小舎の灯』が第2位である。怨念と希望、恨みと賛歌、暗さと明るさ、これらの正反対の意識が、心や情念を歌う歌謡界で交差したのである。

(6) 本

戦前の支配体制に翻弄された人物である尾崎秀実の『愛情は降る星のごとく』が第2位。河上肇の『自叙伝』もよく売れ、河上肇ブームを引き起こした。子供向けの絵本、絵雑誌の出版が復活した。『ひまわり』の中原淳一の絵が少女達の圧倒的人気を博した。戦時体制への怨念と反省が思想界を支配していた。桑原武夫は『現代日本文化の反省』のなかで、近代性を欠く日本の現代文学を批判した。また彼は、「第二芸術論——現代俳句について」のなかで、情緒性に対する執着が、社会性を自覚しない私小説しか生み出さなかったことを批判し、日本文化と日本社会の前近代性を批判した。この年「カストリ雑誌」の氾濫が目立った。

(7) まとめ

終戦2周年で民間貿易も、自動車の生産も始まる。外国の援助物資もあったが、豊かさ意識はいまだ食料と住宅に向けられている。復金インフレのなか、ヤミ米は1年で3倍に値上がりした。「死んでも闇は食べません」という流行語に、ヤミ米を食べて生きている自分に対するやるせなさ、ずるさを感じるとともに、ヤミ米を食べなければ生きられない現実を生み出した政府や社会に対する怒り、怨念がにじみ出ている。住宅問題は、特に引揚げ者にとって大問題であった。自動車のなどの乗り物も不足していた。そんななか、スタイルブックを参考にして、貸し出されたミシンを使い縫い上げた更生服で、ファッションの豊かさを求めている。アメリカ人のようなハ

イヒールやベルトも真似た。またガムやキャラメルの甘味にひとときの豊かさを感じた。宝くじで豊かさのむなしい夢を見た。歌謡界では、前年と正反対の暗さと恨みが多く共感を獲得し、思想界では自己反省が続く。

5. 1948（昭和 23）年

（1）政経、その他

正月には、二重橋が開放され、大正 14 年以来禁止されてきた皇居一般参賀がおこなわれた。2 日間に 13 万人が参賀に訪れた。1 月 26 日、帝銀事件が起こる。2 月、東京都内のデパートで、1 組 4,000 円前後の雛人形の売れ行きが好調であった。（この年日本の伝統文化にかかわる事柄が次々と復活している。5 月隅田川の川開き、6 月歌舞伎の『忠臣蔵』の上演、7 月入谷の朝顔市、11 月七五三の復活、12 月羽子板の販売などである。アメリカ化される生活の一方で、日本人の郷愁が復活しようとしているのである。）2 月 1 日、エリザベス・サンダース・ホームが設立される。増え続ける混血児の救済のためである。4 月 8 日、東宝が 1,200 人の人員整理を発表すると、17 日労組がストを開始した。米軍戦車 7 台、飛行機 3 機など、大がかりな争議に発展していった。10 月 19 日に解決した。4 月、泥棒よけに犬を飼うことがはやる。子犬の柴犬が 6,000～8,000 円、秋田犬が 20,000～25,000 円ぐらいであった。（スピッツが犬の血統登録のトップになるのが、1950（昭和 25）年から 1961（昭和 36）年の間である。一時は全国で 40～50 万頭いたといわれている。）5 月 30 日、渋谷に東急百貨店ができた。1 階に初の「名店街」が設けられた。7 月 13 日、人口減少政策の一環として、優生保護法が成立した。（翌年、中絶できる理由に「経済的理由」が加わる。1952（昭和 37）年には、審査会の許可を得ずに指定医の判断だけで中絶ができるようになった。ヤミ堕胎による死亡が防止できた。人工妊娠中絶件数は、1949（昭和 24）年 246,104 件、1955（昭和 30）年 1,170,143 件と急増する。その数字は届け出のあった件数だけで、実際の数字はその 2～3 倍といわれている。）8 月 28 日、日本テレビが、民間テレビ第 1 号として本放送を開始した。テレビコマーシャルの第 1 号は、「精工舎の時計が正午をお知らせします」という、30 秒のスポットであった。新聞 CM やラジオ CM 全盛の時代であるが、次の時代のテレビ CM 史の幕が開いたのである。以後人々は、CM によって行動し、共通の経験を分かち合い、生活、思想、行動様式のあり方を変えていくのである。6 月、サンドイッチマン第 1 号が銀座に登場した。9 月 11 日、初の国営競馬を札幌で開催した。馬券売り上げ 910 万円であった。11 月 20 日、初の競輪が小倉市で開催された。入場者は 4 日間で 55,000 人であった。11 月 12 日、極東国際軍事裁判所が戦犯 25 人に有罪判決を下す。12 月 18 日、GHQ が、日本経済の自立とインフレの収束を目標とする経済安定 9 原則を発表した。この年だけで、踊る宗

教など 515 の新しい教団が開教した。新宗教ブームが起こった。

（2）食 料

1月15日、1944（昭和19）年から預かってきた乳児200余人のうち103人を餓死させ、養育費（1人当たり5,000から8,000円）や配給品（ミルク、砂糖、米、葬儀用の酒など）を着服していた夫婦が逮捕されるという寿産院事件が起きた。3月16日に発表された前年度産米は、3,055万石で、政府目標を達成した。4月1日、6大都市の保育所300ヶ所で、ララ物資による給食が開始された。7月9日、消費者米価を、10kg 148円50銭から266円に値上げした。8月16日、大阪で約50の婦人団体が肉類の値下げ運動を起こした。10月、東京の主婦連が同じ運動をする。栄養学上、動物蛋白質が大幅に不足しているからである。8月24日、東京の葛飾区で主婦15,000人が、主食の特配を要求した。9月には、新米3日分の配給が始まった。10月、カボチャの人气が急落し、大阪中央卸市場では390トンの滞貨が発生した。10月、砂糖の輸入が急増した。前年12月からこの10月までで砂糖の輸入が54万トン。菓子業界も活況を呈した。11月1日には、主食の米が配給で一人1日当たり2合7勺に増配された。消費者物価も1升51円41銭に改訂された。11月、戦後初輸入の台湾バナナ約26トンが、福岡の門司港に到着した。

（3）住 宅

1月7日、引揚げ者など住まいのない人々が、東京三鷹の日本無線倉庫を占拠した。3月1日、日本勧業銀行が、特賞に住宅が当たる住宅定期預金を開始した。4月12日、建設院が、2ヶ月で建つ12坪の家を発表した。10万円であった。6月17日、東大生9,000人のうち2,000人が下宿難であった。6月24日、文部省が住宅難で校舎住まいの先生2,000人に追い立ての最後通告をする。先生も学生も住宅難に苦しんでいた。7月、東京都は、進駐軍の放出物資で集団住宅1,000戸の建築を決定した。8月31日、臨時建築制限規則を公布した。家族5人までの専用住宅面積を15坪まで拡大し、1人増すごとに1.5坪までの増築を認めた。9月30日、初めての東京都営住宅の公開抽選がおこなわれた。申し込みは予定の250倍であった。10月には、東京都スピードくじの賞金に住宅が登場した。住宅への欲望も強く存在していた時代である。

（4）ファッション

正月の盛り場には晴れ着や日本髪が氾濫した。5月の川開き、7月の朝顔市では浴衣姿の男女が目立った。5月26日、東京神田の共立講堂で「全国ファッションショー」が開かれ、4,000人の入場者を集めた。（4月5日、東京の銀座のキャバレー「美松」で日本人ダンサーによるキャバレー・ファッションショーが開かれている。）一般向けとしては戦後初のファッションショー

であった。5月、火熱式でない電気パーマが流行する。8月、リッカーミシンが月賦販売を開始する。洋裁学校もブームになり、翌年との2年間で全国で2,000校が開校し、生徒数は20万人にも達した。12月下旬、天然ゴム製のバスト・パットが登場した。強い憧れ対象であるアメリカン・ファッションの模倣である。この年クリスチャン・ディオールのロングスカートが大流行する。ディオール旋風が日本で、ヨーロッパから1年遅れで始まる。ディオールは、1947年春パリでおこなわれた最初のコレクションで大成功をおさめた。彼のモードの優美さ、贅沢さは、戦時下の質素、儉約に飽き飽きしていた世界中の女性達を熱中させたのである。彼は1957年に死亡し、そのあとをイヴ・サンローランが、後任のデザイナーとして就任した。（20世紀モード史、ブリュノ・デュ・ロゼル、西村愛子訳、326頁参照）肩パットの入ったボレロ風上着やオイルシルクのレインコートが流行した。若い男性にリーゼントスタイルが流行し、男性の美容院通いも目立ちはじめた。食うや食わずの状態が少し改善の兆しを見せたが依然として解決していない、さらに満足な住まいもない状態でも、ファッションへの欲望は根強く存在していた。

（5）音 楽

昨年（1956年）の9月にデビューした笠置シズ子（1934-2016）が歌う『東京ブギウギ』のレコードがリリースされ、日本中にブギウギ旋風が吹き荒れる。次々とブギものをヒットさせ、ブギの女王としてカラット明るい歌声と、元気いっぱいのパフォーマンスで、日本人を元気づけた。『憧れのハワイ航路』、『湯の町エレジー』などもヒットした。アロハシャツを着て、ハワイの歌を歌い、アメリカ気分を味わったのである。憧れは遠くに存在した。

（6）本

6月13日に入水自殺した太宰治の『斜陽』がベストセラーとなる。前年、華族令が廃止され、多くの華族がその生活を変貌させた。この現実と重ね合わせて、滅びゆく貴族の姿を描いた小説が読まれたのである。「斜陽」がこの年の流行語ともなった。（昨年（1955年）の10月、皇族会議で、秩父、高松、三笠の3直系宮家を除く山階、賀陽、閑院など11宮家51人の皇籍離脱が決定された。）岸田国士が『日本人とはなにか』のなかで、日本人奇形論を唱えた。日本人は、封建的、非科学的、利己的、野蛮的などの、紋切り型の反省ではすまないほどの奇形であり、再起は絶望的であると論じた。国民性の全面否定がきわまった主張である。12月に、歴史上初めて外国人ルース・ベネディクトによる本格的・総合的な日本人論である『菊と刀——日本文化の型』が翻訳・出版された。1988（昭和63）年までに百万部を超す大ロングセラーとなる。彼女は、日本の文化をアメリカの文化と比較し、日本の文化を集団主義と恥の文化と規定し、アメリカの文化である個人主義と罪の文化と比較した。この本を批判・検討することで、翌年から、日本文化研究が進展

することとなる。

（7）まとめ

不可解な帝銀事件や大規模な東宝紛争も起きた。ベビーブームのなか、食に関する痛ましい事件・寿産院事件が起きた。だが食料事情は少しずつ改善している。価格は上昇したが米の生産も増大し、米も増配になった。代用食であるカボチャの人気も下がった。住宅事情も改善に向かおうとしている。衣料では新しい豊かさを追求している。ディオール旋風が、1年遅れで日本でも吹いた。初めてのファッションショーも開かれた。男性美容も話題になる。競輪・競馬に夢をかけた。パチンコ屋が増えた。ブギウギの歌声に合わせ、明るく踊りまくった。アロハシャツを着て歌うことで、ハワイ気分を味わった。朝顔や花火に、浴衣を着て涼を求めた。お雛様、羽子板、七五三など戦前の日本文化も復活している。どんな時でも、そして少しでも安定化に向かえば、さらなる多様な豊かさを求めるのが人間である。

6. 1949 年（昭和 24 年）

（1）政経、その他

1月2日、東京の上野動物園に子供連れが殺到した。入場者 26,400 人と平日の 6 倍であった。（ゾウなどの新しい動物が次々と入ってきている。）3月、東京都内の定期観光バスが再開された。3月、京都や奈良などへの団体旅行が増加した。3月7日、GHQ 経済顧問ドッジが、日本経済安定策を明示した。3月22日、ドッジの方針に基づいた、超均衡予算の今年度予算案が、GHQ から内示された。財政と金融の超健全化を一挙に実現しようとしたものである。このドッジ・ラインは、インフレを抑え、大企業の合理化、鉱工業生産の増加、生産能率の向上、規制緩和などには成功したが、中小企業の倒産、失業の増加、農村の疲弊という恐慌と社会不安をもたらした。4月25日、商品別為替レートを止め、1ドル=360 円の単一為替レートを実施した。（1973（昭和 48）年 2 月 18 日変動相場制に移行するまで続いた。）国際経済社会への復帰に向けての第一歩となったが、円安だった生糸、陶磁器、木材、造船などの業界は大打撃を受けた。5月16日、証券取引場で、戦後初の立ち会いがおこなわれた。証券民主化が始まった。しかしこの年の末から翌年にかけて恐慌相場の様相を呈した。株価は 1 年でほぼ半値に下落した。5月20日、吉田内閣で、緊急失業対策法が施行された。1948 年末の経済安定 9 原則の実施などの圧力で、政府も企業も大量解雇をおこない、失業問題が深刻化した。失業者は、1947 年の職業安定法により設置された公共職業安定所で、「職よこせ」運動を展開し、全員就労や賃金保障、賃上げを要求してデモをおこなった。5月21日、東京の新宿御苑が一般に公開された。5月、商工省がナイロ

ンを東洋レーヨン（現在の東レ）、ビニロンを倉敷レーヨン（現在のクラレ）に集中生産させることを決定した。6月1日、国民金融公庫が設立された。貸付限度1世帯5万円（連帯貸付の場合は50万円）、貸付期間3年以内、貸付利率1割2分以内。1万人以上が押しかけた。6月10日、日本国有鉄道、日本専売公社が発足した。6月11日、東京都は、失業対策事業の日当を245円に決定した。「ニコヨン」の起りである。7月4日、マッカーサーがアメリカ独立記念日に際し、「日本は共産主義東進阻止の防壁」と言明した。7月6日、下山定則国鉄総裁が、線路上で轢死体となって発見される事件が起きる。7月20日、国鉄は、37,000人の第1次人員整理を発表した。全体で9万人にものぼる整理となった。7月15日三鷹事件、8月17日松川事件と続けて真相不明の事件が起きた。それ以後労働争議は鎮静化していく。8月3日、GHQが、集中排除審査委員会の任務を完了したと発表した。財閥解体の終了である。8月27日、資源庁が、ガス使用量の無制限許可を発表した。ガスの24時間供給が始まったのである。しかしガスコンロやガス台が普及するのは、昭和30年代に入ってからである。9月15日、恒久的かつ安定的租税制度の確立を目指したシャープ勧告が発表になった。翌年度予算の租税改正にもりこまれていった。歳出と歳入の合理化が進められた財政改革である。10月、乗用車製造制限が解除された。同時に通産省は、小型自動車を年間5,000台製造する計画を立てた。自動車工業は、厳しい自由競争の時代に入っていた。11月24日、銀座でヤミ金融「光クラブ」を経営する山崎晃嗣（27歳）が、青酸カリで自殺する。彼は7月24日、物価統制令銀行法違反の容疑で逮捕され、処分保留のまま釈放されていた。債権者が取り付けに押しよせ、経営が破綻し、自殺したのである。彼は、東大法学部の現役の学生（復員後1946（昭和21）年復学）で、成績は全優に近く、精密機械のような、ドライな合理主義者であった。自己の能力を客観化するために高利貸しを営み、人生を自己の脚本どおりに演じ尽くして自殺した。これまでにない、大人が分からないタイプの若者が起したのが、「光クラブ事件」であった。大人と若者の世代間のギャップの拡大を示す事件である。（戦後若者文化の光芒、岩間夏樹、20頁参照）12月10日、湯川秀樹が日本人初のノーベル賞を受賞する。12月、お年玉付き年賀はがきが1億8,000万枚発売になる。郵政省は、初のアドバルーンを浮かべ、PRに励んだ。東京都内の自動車が急増した。警視庁に登録された自動車数は、前年の39,096台から、この年の12月50,214台に増大した。

（2）食料

1月7日、総理府からの発表では、前年11月における1世帯の月収は10,705円であった。1月、1本1,500円前後のサントリー角ビンが出まわる。2月、兵庫県尼崎市中の密造酒部落を、武装警官が急襲し、130人を逮捕した。この頃、カストリやドブロクなどの密造酒が急増したからである。2月、ヤミのそば屋が増加したため、東京や大阪で自由クーポン制の公認そば屋が再

開された。5月7日、1947（昭和22）年7月から休業していた全国の料理飲食店が再開した。屋台も東京都内に3,300台出現した。6月1日、大都市にビヤホールが復活した。東京だけで21ヶ所であった。8月6日、国鉄が、食い放題列車を走らせた。形の崩れた小鰯3枚、西瓜1切れ、芋4つ、小さなまくわうり1つで、参加料330円であった。900人が参加した。9月5日、第1回の米価審議会が開かれた。9月15日、東海道線に食堂車が復活した。9月、大日本麦酒が、日本麦酒（現在のサッポロビール）と朝日麦酒に分裂した。10月20日、米の供出の割り当てが、4.9%と不調であった。この年に京成線に行商専用電車が登場した。最盛期には千葉県農家の主婦3,000人が利用した。買い出しの逆である。この頃、配給の砂糖を使って作るカルメ焼きが流行した。人々はその甘さに魅了された。

（3）住 宅

1月1日、大都市への転入抑制が解除され、10日間で東京だけで6万人が転入した。2月7日、東京上野の凍死者は、前年冬の100人から今年の9人に激減した。3月1日、東京の新宿に、戦後第1号の都営アパート団地戸山ハイツ1,053戸が完成した。4月27日の再抽選分33戸に対して1万人が殺到した。6月、東京の芝高輪に、戦後初の鉄筋の都営アパートが完成した。4階建て、9棟188戸、専有面積は39.5平米で、間取りは8畳と6畳に台所、トイレ付きであった。家賃は550円と、民間平均の2倍以上と割高であったが、220倍の申し込みが殺到した。6月30日、臨時建築制限規制が改定され、30坪以下の住宅は届出だけで建築できるようになった。10月、東急電鉄不動産部（現在の東急不動産）が、東急文化小住宅を売り出す。通称3坪住宅といわれていた。10月、結婚相談所にくる女性の男性理想像は、「アパート住まいの男性はイヤ、一戸建ての自宅を持っている人」が圧倒的であった。全国の住宅建築戸数は711,000戸であった。特に炭坑地域で盛んだが、1人当たりの平均畳数は3畳ぐらいであった。

（4）ファッション

1月、資生堂が初の高校巡回特別美容講座を開始した。2月、衣料品が配給になった。5月、ドレスメーカー女学院から『ドレスメーカー』が創刊された。タンジャケット、サイプリーツといった珍カタカナ用語解説で人気を博した。7月、編み物ブームで、『主婦之友』、『婦人世界』、『ホーム』などの婦人雑誌は9月号が、どれも編み方の付録を付けた。7月、和光商事（現在のワコール）がブラ・パットを売り出す。これを付けるとデカパイに見えるというので、女性が飛びついた。固定するのが楽なスポンジ製が登場する1952（昭和27）年に、再びブームになる。8月26日、岐阜の斐太高校の生徒会議で、アロハシャツと色眼鏡の追放を決定した。アメリカ人の模倣願望が、アロハシャツと色眼鏡の流行を生み出したのだが、その願望に反発する人も多かつ

たのである。8月、東洋レーヨンがオールナイロン短靴下を発売した。ナイロンベルトが流行する。別珍の足袋の需要が増大する。4,400万足が生産された。化粧品の出荷高が増大したこの年が、化粧業界発展のスタートの年といわれている。スタートを助けたのがやはり外国の化粧品メーカーであった。アメリカのマックスファクターは、東京の日本橋に総代理店を開設して、本格的販売活動を開始した。（1953（昭和28）年、マックスファクターは日本での化粧品の生産を開始する。）（化粧品のブランド史、108頁参照）

（5）音 楽

もっとも話題になった歌は『青い山脈』であった。藤山一郎と奈良光枝の若く明るい歌声に日本中が魅了された。10月24日、美空ひばりが『悲しき口笛』で、映画初出演をはたし、主題歌もヒットさせた。昨年（1952）の5月1日にデビューし、天才少女として評判になったのだが、今までヒットに恵まれなかった。このヒット以後、昭和の歌姫として国民的アイドルに成長していく。この年は演歌のブームが起きた年である。田端義夫の『玄海ブルース』、近江俊郎の『湯の町エレジー』（40万枚のセールスを記録する）などに、日本人の郷愁を感じたのである。

（6）本

長崎での被爆後の生活を綴った永井隆著『この子を残して』が30万部を超えるベストセラーとなった。戦争で身内を亡くした読者の共感と呼んだのである。A級戦犯の獄中生活を記した花山信勝著『平和の発見』が第9位になる。前年度に出た極東軍事裁判の判決への関心の深さが購入動機である。戦争が残した傷跡の深さを伝える内容に共感と呼んだのである。3月、前年度に翻訳された『菊と刀』の影響を受け、法社会学の川島武宣は、『日本社会の家族的構成』を書き、そのなかで、集団主義と恥の文化の非近大的家族原理を否定し、民主主義的倫理を実現するために精神的内面革命をおこなねばならないと、主張した。この年が紙芝居の最盛期であった。

（7）まとめ

1ドル＝360円時代の開幕である。ドッジ・ラインとシャープ勧告によりインフレは押さえつけられたが、厳しい恐慌と失業問題が日本を襲った。下山事件など、原因不明の事件も起こり、暗い世相の時代であった。それでもビヤホールや料理飲食店は開店され、大都市への転入も解禁になり、衣食問題も少しずつ改善されている。米の供出割り当ては不調だが、買い出しでなく行商のおばさんが売りに来る。狭いが我が家も建った。一戸建て自宅の男性が理想的男性になった。動物園にも行き、団体旅行も楽しんだ。高校生の時から化粧の楽しさを教わった。アロハシャツや色眼鏡が流行する。それに反発する人もでる。演歌で日本人の郷愁を歌う。豊かさが少しずつ

実現しようとしている。そんななか、美空ひばりが国民的アイドルになっていく。

7. 1950（昭和 25）年

（1）政経、その他

1月1日、マッカーサーが、「憲法9条は自衛権を否定していない」という声明を発表した。同日、外貨管理権を日本政府が獲得し、民間貿易が再開した。1月7日、1,000円札が2,500億円分発行された。1月31日、ブラッドレー米統合参謀本部議長らが来日し、沖縄と日本の軍事基地の強化を発表した。3月2日、池田蔵相が「中小企業の一部の倒産やむなし」と発言した。ドッジ・ラインによる超緊縮策が生んだ、不景気下での失言である。4月8日、普通自動車の公定価格制度が廃止され、自由価格になった。4月、三洋電機が、プラスチック製キャビネットを使ったラジオを発売し、大ヒットとなる。4月22日、山本富士子が第1回ミス日本に選ばれる。この影響で、ミス・コンテストが流行する。5月、日本石油に、戦後初めての外国原油の輸入が許可された。6月6日、マッカーサーが、徳田球一ら、国会議員を含む共産党中央委員24人の公職追放を指令する。この年、報道機関、民間企業、公共企業などで、多数の共産党関係者が解雇された。レッド・パージである。6月25日、朝鮮戦争が始まる。特需ブームが起こる。8月25日、経済安定本部が、朝鮮戦争特需が144億円と発表した。朝鮮動乱の3年間で、特需発注額の累計は9.8億ドルを数え、そのうち7割が物資調達、3割がサービス調達であった。特需の大量発生とともに、輸出も伸張り、生産水準も上昇した。大型トラックが、トヨタ4,679台、日産4,071台、いすゞ1,276台を1年間に注文された。（トヨタ自動車20年史、317頁参照）この特需の受注が、大幅な人員整理をせざるをえなかったほど悪化した企業の経営危機を脱しさせ、さらに一般需要をも生みだし、好況をもたらしたのである。鋳工業生産水準は、この年の10月には戦前（昭和9～11年平均）水準を突破した。翌年には実質国民総生産も戦前水準に到達した。特に「糸へん」景気（ヤミ糸を使用して「ガチャンと一織り1万円」の儲けがあることを揶揄して「ガチャ万」といわれていたほど景気が良かった）、「金へん」景気といわれたように繊維や金属業界が大いに潤った。復興が大いに促進されたのである。翌年の6月、対日援助が打ち切られる。この朝鮮戦争ブームは、翌年の6月にピークを迎え、それ以後不況風が吹き始めるが、10月まで続く。この特需ブームを下敷きにして、次の投資景気や消費景気が起こるのである。7月、日本労働組合総評会議（総評）が結成された。大きな組織力で、政治的影響をおよぼしていくことになる。8月10日、警察予備令を施行し、警察予備隊が創設された。7月21日に、吉田首相が、「警察予備隊は再軍備にあたらない」と、国会で答弁したにもかかわらず、日本の再軍備化が始まったのである。8月16日、東京の新宮プールでおこなわれた日米対抗水泳大会 400m 自由型

で、古橋広之進が優勝した。8月、東京通信工業（現在のソニー）が、初のテープレコーダーを発売する。16万円であった。輸入テープレコーダーも発売された。9月22日、東京千代田区で日本大学本部会計課員が銀行預金（職員の給与191万円）を引き出して帰る途中、強盗に奪われた。2日後、犯人の山崎啓之19歳（被害者の同僚の運転手）が、恋人の藤本左文18歳とともに逮捕された。2人は、潜伏中に、奪った金で高級ファッションを買いあさり、身につけていた。逮捕される時、山崎は平然として「オー、ミステイク」と叫び、取り調べに対しても英語混じりで答えたといわれている。本気でアメリカ人になろうとしていたのである。この「日大ギャング事件」と前年の「光クラブ事件」に対して、大人世代は理解できない若者のアブレ犯罪であると当惑するばかりであった。しかし大人の作り上げようとしている秩序に懐疑し、半人前としか見てもらえないという不満を抱いている若者世代からは、どこか共感できる事件であった。若者は、犯人のように、大人の権威に対して抵抗し、自分の欲望（アメリカ人になりたい）に忠実に行動したいという憧れを感じていた。（若者文化の光芒、21頁参照）岩間夏樹が「プレ団塊世代」と呼ぶ、昭和10年代に生まれ、疎開を経験し、戦後に育った若者達が、大人の秩序回復への容易な行動にうさんくささを感じ、自己の欲望に忠実に行動するということで自己確立をしいたのである。若者は昭和30年代から太陽族、ロカビリー族、六本木族などとして、大人文化と峻別する文化を築き上げることとなる。その端緒が2つの事件である。（若者文化の光芒、30頁参照）10月16日、社会保障審議会が「社会保障に関する勧告」をおこなった。社会保障が、「疾病、負傷、死亡、老齢、失業、多子その他の困窮の原因に対し」て、保健または公的負担で経済保障をおこない、生活困窮者に対しては生活保護などの国家扶助により最低限の生活を保障するとともに、公衆衛生および社会福祉によって国民に文化的な生活を保障する統合的なシステムとしてとらえられた。初めての体系的社会保障制度が、GHQの強い働きかけで提示されたのである。後の社会保障制度整備に大きな役割を果たした。（家族データブック、21頁参照）11月25日、飯野海運のタンカー「栄邦丸」が進水した。戦後初の国産大型船である。12月7日、池田蔵相が「所得の多いものは米、少ないものは麦を食べるように」と発言し、物議をかもし。特需ブームのなか、貧困はいまだ続いている。この年、大企業に定期昇給制度の導入が始まった。「リコーフレックス」の発売で、2眼レフ・ブームが起こる。『ライフ』に載ったダンカンの作品「仁川、暁の敵前上陸」が日本製のカメラで撮影されたところから、日本製カメラの優秀性が世界の注目を浴びる。カメラの新規購入数と写真フィルムも、1951（昭和26）年千人当たり1.7台、33.8m²、1955（昭和30）年9台、87m²と急増する。この年、子供の家出や犯罪が急増した。3年前には2,000人だった警視庁の収容者が、この年6,5000人を超えた。1ヶ月150～200人の増加である。推定では全国で4万人に達する。貧困が大きな原因である。動物園の開園ラッシュが続いた。3月高知市立動物園開園。4月移動動物園が全国を回り始める。4月甲子園動物園開園。9

月小田原動物園開園。11月浜松市動物園開園。そのための動物の輸入も増大した。

（2）食料

1月、カレー、ソース、焼酎の乱売合戦が激化した。1月、戦後初の菓子展覧会が東京の上野の松坂屋で開かれる。1日の売り上げ70万円であった。2月22日、牛乳の自由販売が始まる。3月9日、文部省の調査で、学童の体位が目立って向上し、近視や虫歯も激減していることが分かった。食料事情の好転によるものである。3月31日、イモ類の統制が解除され、10月から自由販売ができるようになった。この年の冬には焼きイモブームが起きた。4月、洋酒統制が撤廃され、寿屋（現在のサントリー）が、国民的ウィスキー「トリスウィスキー」を発売する。（翌年、各地に国民酒場「トリス・バー」がお目見えし、ブームとなる。）5月、東京で外食券なしで米以外の主食（そば、うどん、パン）が食べられることとなる。そば屋が復活した。8月1日、森永製菓が「ミルクキャラメル」を発売した。公定価格撤廃を受け、1箱20円で売り出された。1ヶ月で1,000万個を売り上げた。宣伝・販促は、大がかりなもので、1953年にはヘリコプターで全国を巡回した。甘味に飢えていた人々に受け入れられたのである。9月1日、全国8大都市の小学校で完全給食（ガリオア資金によるパン給食）が開始された。12月13日、政府は生産者米価を石当たり5,529円と告示した。12月27日、翌年の1月1日から消費者米価10kg当たり515円に値上げと発表した。12月21日、食糧庁は、煮豆、豆腐、油揚げ、納豆、蒲鉾などの正月用品の特配を発表した。12月、豚の屠殺数が1,132,449頭となり、戦前の水準まで回復した。牛は428,375頭だった。しかし動物性蛋白質の栄養は不足していた。米や食料品が値下がりした。米の1kg当たりのヤミ値は、石川県で70円、福井県や富山県では50～60円で、公定価格以下であった。東京の上野では120円、郊外では160～170円であった。牛肉375グラム100円が細切れで70円、卵1個12～13円が10円以下であった。9月、2年前のようなチークダンスの流行でない、バレーと社交ダンスが流行する。東京のバレー教習所は約30軒で、生徒は5,000人から6,000人程度であった。11月、ビタミン剤ブームで魚の肝臓が異常に騰貴した。東京都内のデパートで、中元セール、歳暮セールが再開された。

（3）住宅

2月5日、住宅規模制限が全面解除になる。2月16日、電力制限も撤廃される。6月6日、住宅金融公庫が発足した。貸し出し金額は、建坪9～30坪で、18坪までの工費の75%であった。6月、愛和工業（現在のサンウエーブ）が、ハンダ付けによるステンレス流し台を発表した。9月、東京都営住宅の建設戸数が26,145戸となったが、都内の宿なし世帯は未だ39万世帯にのぼっていた。しかし、動乱景気により突如として建築ブームが起こる。雨戸の代わりとしての軽便シャッ

ターが一躍ブームの目玉として脚光を浴びた。

（４） ファッション

1月、資生堂の「チェーンストア・スクール」が復活し、美容講座を開く。3月24日、田中千代が、東京の新宿のデパートで「ニュー着物ショー」を開く。着物だけのファッションショーは初めて。春、衣料品が値下がりした。毛織物やウール地 1 ヤール 700～800 円（前年 1,200～1,300 円）、背広 4,600 円（前年 12,000 円）、靴 2,200～2,500 円（前年 5,000～6,000 円）であった。春、イギリス映画『赤い靴』の影響で、赤い靴がブームになる。8月、スタイル社から初めての男性用ファッション雑誌『男子専科』が創刊された。この年は、高級紳士服地「ミリオンテックス」が発売されて人気を博した。ワイシャツ留めにもアームレット型や吊り型などが出てきた。男性のファッション志向が芽生えてきた時期である。クリスチャン・ディオールは、春夏パーティカル・ライン（垂直ライン）と秋冬シースルックを発表した。この年、女性の化粧にアイメイクが登場した。「25 歳以下の方はお使いになってはいけません」というキャッチコピーで注目を集めたマダムジュジュという化粧品が、年間 700 万個も売れた。群是製糸がナイロンストッキングを売り出す。

（５） 音 楽

レコード 1 枚の値段が 170 円と決められた。戦中の 100 倍の値段であるため、売り上げは下落した。それでも美空ひばりの『東京キッド』がよく売れた。『ボタンとリボン』などの洋モノも大ヒットした。アメリカのレコード会社であるデッカ、マーキュリー、キャピタルなどが進出し、ジャズやラテン音楽が大流行したのである。当時 150 近くのバンドが作られ、バンドマンの数は 3,000 人を超えていた。笠置シズ子の『買い物ブギ』が、第 3 位になっている。

（６） 本

谷崎潤一郎著『細雪』が最も売れた。第 2 位が辻政信著『潜行三千里』である。この本を契機として戦記ものが多く出版された。前年 10 月に出版された日本戦没学生の手記『きけわだつみの声』が、20 万部と売り上げを伸ばし、第 7 位に入った。戦争がもたらした苦悩、若者達の悲劇に心を打たれたのである。『チャタレー夫人の恋人』が発禁までの 2 ヶ月間で 15 万部売れる。

（７） まとめ

6 月の朝鮮特需ブームから、急速に景気が良くなる。繊維と金属分野で好況を迎える。食料も安くなった。完全給食も進み、児童の体位も向上した。貧乏人でも、麦なら食えるようになった。

菓子業界も活況を呈している。都市部以外の住宅事情も好転する。スピッツが犬の血統登録のトップになった年である。50万匹はいるといわれていた。動物園も次々と開園している。2眼レフ・カメラのブームが起きる。動物園などでの幸せな家族を写すためである。衣服の値段も下がった。男性ファッションも注目される。バレーや社交ダンスが流行する。レコードは洋ものが流行する。前年の「光クラブ事件」、今年の「日大ギャング事件」に見られるように、若者と大人の世代間の断絶が始まろうとしている。自分の要望に素直にアメリカ的豊かさを求めようとする若者が現れたのである。大人は、中元や歳暮に豊かさを感じていた。貧困から、家出や犯罪にはしる子供が急増している一方である。

8. 1951（昭和26）年

（1）政経、その他

2月1日、日本輸出銀行が開業した。翌年の4月1日から日本輸出入銀行に発展し、輸入金融業務もおこなうようになった。輸出入を促進するための長期金融がおこなわれた。4月20日、日本開発銀行が設立され、5月15日から営業を開始した。産業設備投資のための金融機関である。2月、賃上げや平和擁護を中心に春闘が始まる。3月31日、医療費の公費負担など、結核予防法が全面改正された。この年、結核による死亡率が10万人に110人と、最盛期の1940（昭和15）年と比べると半減した。死因の第2位に落ちる。第1位は脳溢血である。5月1日、北海道、東北、東京、中部、北陸、関西、中国、四国、九州の9電力会社が発足した。電力会社の再編成が完了した。日本発送電と九配電は解体され、新たに全国9地域に発送配電を一貫して運営する9電力会社が誕生したのである。石炭重視のエネルギー政策から、電力エネルギーの拡充への変更である。夏の雨不足で電力不足が深刻化した。5月、この月だけで、生活難から売られた児童は前年の3倍の644人であった。厚生省の推定によれば、この1年間に売られた児童は、約5,000人である。順位は、山形、福島、奈良、大阪、兵庫、神奈川と続く。ほとんどが特殊飲食店に売られた。5月、名古屋を中心にパチンコが大流行する。（名古屋649店、愛知県下1,161店であった。）「軍艦マーチ」も復活した。6月11日、東洋レーヨンとアメリカのデュポン社とのあいだでナイロンの技術提携の契約を結ぶ。東洋レーヨンの資本金が7億5,000万であったのに、特許料は10億8,000万円であった。わが国初めてのナイロンの生産を始める。化繊からビニロンやナイロンなどの合繊への変身がこの頃すすめられたのである。7月1日、外貨割り当てを受けた者は外国自動車を購入できるようになった。外車がステータス・シンボルとなっていた。7月、電気洗濯機メーカー5社の月産は200台。価格は26,000～67,000円とまだ高価であった。7月10日、第1回朝鮮休戦会議が開かれる。同日、政府は財閥解体の完了を発表し、株式会社整

理委員会は解散した。しかしこの頃から、旧財閥に代わって、銀行が財閥の本拠になっていった。金融資本主義が始まろうとしている。1952（昭和27）年頃から財閥系企業の社長会がその存在を表面化していった。9月8日、サンフランシスコで、対日平和条約と日米安保条約が調印された。翌年の4月28日、平和条約は発効し、6年8ヶ月におよぶ占領から開放される。この開放感が、消費と投資に火を付けたのである。爆発的成長である高度成長の準備が着実にこなわれていく。その先駆けが1951（昭和26）年10月から1954（昭和29）年11月まで続く三パ景気である。特需は途絶えたが、特需ブームで一息つき、人々の心が落ち着いてくると、今まで押さえられてきた飢餓感が、開放感と合わさって急激に吹き出してきた。これが投資・消費景気を起こした。パルプ、デパート、パチンコの三パをとって「三パ景気」とも呼ばれた。1952（昭和27）年、1953年の2年間で、個人消費は物価上昇分を差し引いても3割近くも増えている。1953年にはデパートの売上高が、戦前の水準に回復した。豊かさの殿堂であるデパートが活況を呈していくのである。（百貨店の文化史、山本武利・西沢保編、10頁参照）民間設備投資も盛り上がり、実質の伸びでみて、1952年14%増、1953年21%増であった。投資の中心は、電力、海運、鉄鋼、石炭の四天王であった。10月、松下電器が、家電では初の月賦販売会社を設立した。1年遅れて三洋が設立し、次いでシャープ、ゼネラルも設立した。（当時は貧乏人が利用するものというイメージが強く、普及しなかった。1953（昭和33）年頃から急速に普及し出す。）12月、本田技研が、4サイクルのオートバイ「ドリーム号E型」を発売した。この年、日本製のおもちゃのB29爆撃モデルがアメリカで大人気になり、「今度は日本のB29がアメリカ本土を爆撃した」と言われた。本格的ビルが増え、第1次ビルブームが起きる。セメント、肥料、砂糖業界が好景気で、「三白景気」とも言われた。この年、日本商業学会が設立され、マーケティングの発展に貢献することになる。新しい製品の普及宣伝をおこない、その需要を喚起するために、新聞、ラジオ、テレビ、ネオンなどの媒体が使われた。この頃は5割以上が新聞を媒体としていた。

（2）食料

1月16日、民営米屋の登録が始まる。4月1日営業開始である。2月1日、完全給食を全国の市の小学校で実施する。すべての小学校へ拡大されたのは、翌年の4月である。2月、前年度の大学・高専学生の身体検査の結果、男子の体位は戦前の水準に回復し、女子は突破したことが分かった。4月16日、千葉県大和村（現在の東金市）の上宿地区で、冠婚葬祭の料理は3品以内、酒1合、違反者は向こう3軒両隣の連帯責任で米1俵ずつ供出させることを決める。6月29日、東京都教育庁は、各校長に、「最低基準の600calを下回る給食では、学童の体位は保てない」と警告した。なかにはキャベツと鯨の煮付けばかりの小学校もあったからである。6月、厚生省の栄養調査によると、東京や京都など大都市の栄養摂取量は、平均1,400cal、盛岡、前橋、山

口などは1,200 calであった。食料事情は、まだまだ厳しい状態であった。7月、各デパートの中元セールの人気は、300～500円のものと、1,000～2,000円のものであった。ビールやウィスキーが多かった。カルピスも復活した。8月、ビヤホールに女性客が増える。9月1日、民放ラジオがスタートした。名古屋・中部日本放送が第1声を放送した。12月25日にはラジオ東京（現在のTBSである）が放送を開始する。9月10日、ベニス国際映画祭で、監督・黒沢明、主演・三船俊郎の『羅生門』が、日本映画初のグランプリを受賞する。（翌年、米アカデミー賞最優秀外国映画賞受賞）この年、「養老の滝」がオープンする。赤提灯のチェーン化の始まりである。

（3）住 宅

2月23日、全日本借家人組合（1946年3月6日結成）が、修繕費立替問題などを東京都に申し入れた。4月10日、住宅金融公庫が、『木造住宅平面図集』第1集を刊行した。それが、サンプルカタログとして、戦後の中流階層の住宅建設に大きな影響を与えた。5月21日、第1回1級建築士試験の合格者23,076人、2級建築士合格者39,796人であった。6月4日、公営住宅法が公布された。台所と洋風の食堂は南面し、寝食分離を図るなど、公営アパートの改善が飛躍的に進んだ。またこの年発表された「51C型」で、ダイニングキッチン（DK）が初めて採用され、その後のアパートの原型となる。「51C型」は、寝室2つとダイニングキッチンという間取りであった。主婦の家事の場所と家族の楽しみの場所が1つになったDKのある家＝一家団欒のある家というイメージが作られ、DKのある家が住宅の理想として、憧れの的になった。住宅問題はまだ存在したが、改善の基礎と方向はできあがった。この年、布地張り壁仕上げが流行した。

（4）ファッション

1月31日、衣料切符規制が10年ぶりに廃止された。7月19日、自由販売となる。夏、つば広のパナマ帽が女性の間で流行する。この年、戦時中に姿を消していた腕時計が、生活必需品として、またおしゃれな小物として登場し、飛ぶように売れた。この年の時計の生産高は約300万個であった。需要に生産が追いつかず、大量のヤミ時計が出回った。紳士用は、丸型が中心で、大型で薄手のものが流行した。婦人用は、「南京虫」がアメリカから輸入されるようになり、小型のものが流行する。この年には、国民30人に1人が所有していたのが、1955（昭和30）年には17人に1人が所有することになる。小さいものがもてはやされ、指輪時計、ブレスレット時計、ペンダント時計など、装飾的なものが豊富に出回った。その傾向は、帽子、バンド、洋傘などに及んだ。和装から洋装に代わり、新しい装飾品として時計がもてはやされたのである。（昭和31年度国民生活白書、33頁参照）この年、婦人服に黒の高級別荘が流行した。島田などの日本髪も復活した。

（5）音 楽

1月3日、NHKで第1回紅白歌合戦を放送した。大晦日の放送は1953（昭和28）年からである。3月20日、コロムビアがLPレコードを発売した。ベートーヴェンの『第九交響曲』など5枚、各一枚が2,300円であった。この年は、13歳の美空ひばりの年であった、『私は街の子』、『母を慕いて』、『あの丘越えて』など、彼女が主演をつとめる映画の主題歌がヒットした。津村謙の歌う『上海帰りのリル』が第1位であった。

（6）本

波多野勤子著『少年期』が第1位であった。母と子の手紙のやりとりに感動を呼んだのである。第2位が、笠信太郎著『ものの見方について——西欧に何を学ぶか』であった。日本人が学ぶべき西欧の考え方を、わかりやすく紹介して、よく読まれた。4月、手塚治の「アトム大使」が『少年』で、連載が開始される。翌年の4月「鉄腕アトム」と改題する。18年間にわたって描きつがれる。彼の代表作の1つである。4月、国鉄が、雑誌に玩具や文房具の付録続出につき、特運扱いからの除外を決定する。マンガ雑誌同士の競争激化で、おもちゃなどの付録を付けて売り上げを増加しようとしたのである。おもちゃでなく、マンガ付録を付けるようになった。マンガの質の競争でなく、量の競争しかおこなわれなかった。（戦後マンガの50年史、55頁参照）マンガの世界でも、日本型産業の特色があらわれている。

（7）まとめ

特需ブームのなか、日本輸出銀行、日本開発銀行が設立され、復興に向け着実に進んでいる。電力エネルギーも拡大している。合繊産業も進展している。四天王を中心として、投資も増大している。三パ景気、三白景気にわいている。財閥資本主義に代わり、金融資本主義が経済を支配しようとしている。9月にはサンフランシスコ平和条約が結ばれる。開放感も手伝い、今までおさえられていた豊かさへの欲望が噴出し、消費・投資景気を生んだ。所得も増加し、個人消費は3割増大した。「一尺祝い」の宴会が盛んな農家の冠婚葬祭の料理が、禁止するほど豪華すぎた。憧れの外車がステータス・シンボルとなった。DKが理想的住宅として登場した。腕時計がブームになった。懐かしのミルクキャラメルに感無量の涙を絞った。親指族がパチンコブームを起こした。デパートで豊かさを追求した。社用族が銀座で飲み歩いた。アイドルの美空ひばりの映像と歌声に熱狂した。巷に「リール、リール」のメロディがあふれた。しかし児童売買は前年の2倍となる。児童の体位は向上したが、必要カロリーの半分もとれていない。ブームのおかげで、一部の、少量の豊かさが実現しようとしている。

9. 1952（昭和 27）年

（1）政経、その他

1月16日、復興金融金庫が解散し、日本開発銀行が業務を継承する。1月24日、国際通貨基金 IMF が、日本割当金 2 億 5,000 万ドルを指示する。対日講和・日米安全保障条約が発足した。日本独立の年である。連合軍の占領は終わったが、駐留軍として米軍は居座り続けた。2月、産業合理化審議会から「鉄鋼業の合理化に関する報告」が提出された。鉄鋼業の「戦後第1次合理化計画」と呼ばれるものである。計画によれば、年間投資規模は一挙に 10 倍以上に拡大し、主要設備のほとんどを輸入し、最新のものに変更する。八幡製鉄、富士製鉄、日本鋼管という先発 3 社と、後発の川崎製鉄、住友金属工業、神戸製鋼が、激しい寡占的競争を繰り広げることになる。2月14日第6回冬季オリンピック、7月19日第15回オリンピック大会に、戦後初めて参加した。3月、本田技研が、原付自転車「カブ号」を発売した。庶民の足としてもてはやされる。4月28日、講和条約の発効に伴い、財閥商号の使用も解禁となった。ほとんどがこの年に旧社名と旧マークに復帰している。たとえば、神岡鉱業から三菱金属鉱業へ、中央生命保険から三井生命保険へ、日新化学工業から住友化学工業へである。5月1日、死者 2 人、重軽傷者 500 人にもものぼる血のメーデーが起きた。5月29日、国際通貨基金、国際復興開発銀行（世界銀行）への日本の加盟が承認された。国際経済への仲間入りができたのである。7月21日、経済安定本部は、特需が 2 ヶ年で 6 億 4,000 万ドルに達したと、発表した。9月、早川電機（現在のシャープ）が、12・14・17 インチの白黒テレビ受像器 3 種の生産を開始した。11月21日、国内で初めて製品意匠課を配した松下電器が、京都 YMCA で、国産テレビ第1号の公開実験をした。17 インチ・コンソールタイプで 29 万円した。1954（昭和 29）年に発売された。この年、一般家庭対象の小型冷蔵庫（90 リットル）が発売された。価格は 8 万円で、サラリーマン平均給与の約 10 倍であった。アメリカのデザイナー、レイモンド・ローウィが 150 万円のデザイン料でデザインした「新ピース」が、年間 93 億本の大ヒットとなる。前年度に、日本専売公社は、ヤミたばこ・外国たばこ一掃キャンペーンを実施し、生産体制も整えてきたが、売り上げが伸びなかった。これ以後、工業デザインが、市民権を得ていくことになる。11月27日、池田蔵相が、「中小企業の倒産・自殺もやむを得ない」と失言し、29日に辞任した。12月23日、日産とイギリスのオースチンが自動車の技術提携をした。翌年にかけていすゞはイギリスのルーツと、日野はフランスのルノーと技術提携を結ぶ。これは、欧米自動車の輸入ならびに払い下げ外車が増大し、しかも性能、スタイル、価格とも大きな差があることを、日本の自動車会社が認めたからである。外国の近代的技術を導入し、今までの老朽機械を更新し、経営の合理化を進め、1955（昭和 30）年以降の

本格的量産化の準備をしたのがこの頃である。トヨタは、1953（昭和 28）年 9 月 25 日、「トヨペット・スーパー」を日本人の頭脳と力で生み出すことになる。この年は特に消費景気の年といわれている。その景気は、一面は朝鮮特需の余波と雇用者所得の増加（1952～1953 年の 2 ヶ年を通じて 20%増加した）であり、他面では戦争直後の原材料の輸入途絶により生産が急落した繊維製品や、戦中・戦後に著しく不足状態に陥った家具・什器類（家賃地代を除く住居費）に対する需要の急上昇にもとづいて発生したのである。（昭和経済史、354 頁参照）特に実質被服指数は 1946（昭和 21）年には戦後比 19.7%であったから、1950（昭和 25）年から 1952（昭和 27）年までの間に年々 50%のテンポで急激に拡大したことになる。戦後基準の被服費の相対価格指数（総合指数で被服費指数を割ったもの）も、1951（昭和 26）年 164、1952（昭和 27）年 133、1953（昭和 28）年 124 と急落し、繊維消費の拡大を支えたのである。だが実質被服費の異常な上昇は 1952（昭和 27）年で終わる。さしあたり必要なものはそろったからと言われている。しかし家具・什器類は、実質で 1952（昭和 27）年 47.3%、1953（昭和 28）年 26.1%と高いテンポで増大した。さらに雑貨は、実質で 1952 年 15.4%、1953 年 18.2%と増大した。この傾向は、多少弱められつつも以降に繰り延べられていった。12 月 20 日、青山に初のボーリング場ができた。

（2）食 料

1 月 13 日、神戸港で、輸入ビルマ米から多量の黄変米（かびによる変質米）が発見された。その後、タイ米やトルコ米からも発見され、主婦等がボイコット運動をする。黄変米騒動である。3 月 3 日、主婦連や総評などが、配給米の一人 1 日 3 合配給運動を開始した。4 月 1 日、砂糖が 13 年ぶりに自由販売になる。3 月明治屋、4 月サッポロビールが、オレンジジュースを発売する。オレンジブームを引き起こす。ラムネやサイダーと違い、健康に良く、そのうえ味も良いので好まれたのである。栄養摂取量が、2,033 cal に好転した。6 月、北洋漁場再開で、第 1 回サケ・マス船団が出発した。10 月、魚肉ソーセージの本格的生産が開始され、値段の安さもあって、大ヒットした。マグロ、鯨、鮭などいろいろな素材を取り入れながら、お馴染みのおかずとしての地位を確立していく。7 月 31 日、栄養改善法が公布された。強化食品時代の幕開けである。ビタミンブームも起きた。7 月、中元セールが、戦前の水準にもどった。8 月、即席カレーが人気となる。10 月 24 日、供出完了後の残り米が、自由販売となる。12 月、総漁獲量 482 万トンで、戦前の最高漁獲量 443 トン（1936 年）を突破した。池袋の西武デパートに初めて、冷凍食品の売場が登場したのは、この年である。

（3）住 宅

3 月、東京の墨田区が、水上生活者のために、4 畳半の客車住宅を完成させる。4 月 1 日、政

府は、住宅不足数を316万戸と発表した。4月3日、第1期公営住宅3ヶ年計画が策定された。全国の住宅建設18万戸、うち東京3万戸と決定された。5月31日、耐火建築促進法が公布された。不燃化の促進が始まる。7月19日、東京都が、一定年度をすぎた木造都営住宅の分譲を開始した。9月、新建設社が、3万円の懸賞付き「現代の住宅建設競技」をおこなう。材料不足で、せめて図面の上だけでも夢のある住宅を描こうと、懸賞付き設計コンペが盛んになった。12月27日、不良住宅建て替え事業の第1号が、東京の月島で着工された。

（4）ファッション

1月、全国統一の紳士既製服標準寸法36サイズが制定された。3月、全国統一の婦人子供既製服標準寸法も発表された。3月、東京ファッションモデル・クラブ（TFMC）が結成された。モデルブームが起きる。秋、大阪の阪急デパートで和光商事（現時のワコール）が、わが国で初めての「下着ショー」を開催した。これ以後デパートの下着ショーは花盛りで、1955（昭和30）年12月には、デザイナー鴨居羊子が大阪のそごう百貨店で「W・アンダーウェア展」を開き、見せる下着を発表した。おへその出る浅いパンティやスキャンティ、バタフライなど、スキャンダルを起こしそうな下着が、人々に大きな衝撃を与えた。4月10日、NHKで連続ラジオドラマ『君の名は』の放送が開始された。放送中は風呂屋が空になるといわれる人気であった。翌年に映画化された。夏、浴衣ドレスやナイロンブラウスなどが流行した。プリントの生地も人気を博した。9月、腰までの短いコート「トッパー」が流行する。秋、プリーツスカートが初めて市販される。アコーディオンプリーツが人気となる。

（5）音楽

相変わらずのひばり旋風が吹き続け、『リンゴ追分』が70万枚を売り上げ、第1位であった。第2位が、神楽坂はん子が歌う『ゲイシャワルツ』であった。発売直後に放送禁止となった。他にも『パチンコ節』などの桃色歌謡曲が全盛を極め、退廃ムードが充満していた。独立して浮かれたくなる気分が、退廃気分を生み出したのであろう。第3位が江利チエミが歌う『テネシーワルツ』であった。日本語と英語の2カ国語で歌われ、物珍しさ、アメリカ讃美で、発売直後に20万枚も売り上げた。

（6）本

第1位が、安田徳太郎著『人間の歴史』である。占領状態から解放された日本人が、日本の歴史を再認識するために読んだ。第2位が、源氏鶏太著『三等重役』であった。懸命に働くサラリーマンに共感されたのである。『昭和文学全集』も良く売れる。翌年は第1位になる。

（7）まとめ

日本独立の年である。繊維・鉄鋼・自動車部門の近代化が進む。民間設備投資が伸び、雇用者所得も増加し、消費景気が起こる。実質消費支出は17.5%増である。家具・什器類は実質で47.3%増、雑貨は15.4%増であった。この傾向は翌年も続く。配給米も増加した。魚肉ソーセージ、即席カレー、栄養剤、オレンジジュースに人気があった。住宅不足は316万戸にものぼるが、住宅設計コンペが盛んに開かれた。モデルブームが起きた。下着ショーも人気を博した。ナイロンブラウス、プリーツスカートも流行した。被服費の消費支出金額は逡減したが、ファッションに関する豊かさ意識はとどまることなく、高揚している。健全なひばりの歌声が響くなか、退廃的な桃色歌謡曲も全盛期を迎えている。中小企業の倒産・自殺はやむない時代のなか、人々は様々な豊かさ意識を追求している。

10. 1953（昭和28）年

（1）政経、その他

1月29日、東京証券取引所が、立会時間を臨時短縮した。大衆投資家の出動で、株価が高騰し、出来高が激増したからである。1月31日、太平洋戦争の激戦地サイパン、テニアンなど南方8島への、戦後初の戦没者遺骨収集・慰霊団が、東京湾を出航した。2月1日、NHK東京テレビ局が本放送を開始した。3月15日、日野ディーゼル（現在の日野自動車）が、「ルノー」を85万円で発売した。この年、ノックダウン方式による、外車の発売が盛んであった。3月23日、中国からの集団引揚げ再開第1陣4,000人（以後中国各地からの引揚げが続く）が、舞鶴港に入港した。3月5日、スターリンの死亡により、スターリン暴落が起きた。スターリン重体の報を受けるだけで、東証ダウ平均株価は10%におよぶ史上最大の暴落をした。1951（昭和26）年6月の投資信託発足という好環境に支えられて、動乱直後の東証ダウ平均株価の安値85.25円から、この年2月4日には474.43円となり、約31ヶ月間に5.6倍の値上がりを示したのにである。市場内部の異常な過熱状態と、2月28日、吉田首相が衆院予算委で「バカヤロー」と暴言を発し、その責任をとった3月14日の「バカヤロー」解散の政局不安が、スターリン暴落をもたらしたのである。4月には一度立ち直るが、10月に再び調整場面を迎える。（昭和経済史、335頁参照）この年は、大宅壮一が「電化元年」と呼んだ年である。急速に各種家庭電化製品が一般家庭に普及するようになる。8月、三洋電機が、わが国初の噴流式電気洗濯機を発売した。28,500円であった。夏、家電各社が、電気冷蔵庫を発売した。8万円から2万円と、サラリーマンの平均給与の約10倍という高嶺の花であった。三種の神器といわれたのは、洗濯機、テレビ（8月現在での

テレビ普及率は、0.02%、実数は3,000台。大卒初任給が8,000円のところ、アメリカ製の21インチ白黒テレビ受像器が255,000円であった。11月に三洋電機が17インチテレビ受像器1号機を完成させた。）東芝が、ポップアップ式のトースターを発売したのもこの年であった。7月27日、朝鮮休戦協定が調印された。7月30日、力道山が、日本プロレスリング協会を結成した。8月28日、日本テレビが、民間テレビ局第1号として本放送を開始した。プロレスが人気を集める。街頭のテレビを群衆が取り巻いて熱狂した。試合の序盤で反則に痛めつけられた善玉である力道山が、終盤一気に日本人の武術である空手チョップで反撃に転じ、悪役アメリカ人レスラーをぶちのめすという筋書きに熱狂したのである。この感情を分析すると、当時広く普及していたアメリカへの憧憬の裏側に潜んでいた、屈折した感情（アメリカへの憎悪、憎しみ、ルサンチマン）が爆発したのである。（消費資本主義のゆくえ、88頁参照）9月1日、独禁法が改正された。不況カルテや合理化カルテが合法化され、企業系列化が進められた。特に、鉄鋼業界、繊維業界、電機業界、金融業界で大型合併、グループ化が進んだ。9月初めから日銀は、日銀貸し出しの抑制を始めた。翌年さらに強化し、1954（昭和29）年の前年度比の貸し出し純増は44.3%という急減であった。ブームで輸入が増え、外貨準備高が急減し、「国際収支の天井」が覆い被さってきたからである。（輸入は、IMFベースで1952（昭和27）年の17億ドルから20.5億ドルに増え、輸出は12億ドル前後で大きな変化がなかった。貿易収支は1952年の4億ドルの赤字から7.9億ドルの赤字へと急増した。外貨準備は1952年11月末の11.4億ドルから、1954（昭和29）年6月末には6億ドルにまで急減した。）景気は翌年10月まで後退する。この年は投資景気の年といわれている。名目で個人消費の伸びが1952～1955年間に22.8%から19.1%へ低落したのに反し、民間設備投資は17.1%から26.7%へ急増しているからである。9月25日、トヨタ自動車が、「トヨペット・スーパー」を発売した。102万円であった。12月23日、東京の青山にわが国初のスーパー「紀ノ国屋」が開店した。開店時の品数は600種であった。流通革命の始まりであり、紙袋ブームの始まりでもある。そして、アメリカのようにスーパーマーケットを通じて豊かさが実現するスタイルが始まろうとしているのである。12月、熊本の水俣沿岸で水銀中毒の被害が続出した。水俣病の発端である。1950（昭和25）年から続けていた東京都内のゴミ海洋投棄は、日量1,224,000リットルにまで増大した。文部省の調査によると、貧困が主因による長欠の小・中学生は289,000人であった。

（2）食料

6月1日、大阪の梅田の第一生命ビル（わが国初の12階建て高層ビルである）屋上に、ニュートーキョー経営の「アサヒビアガーデン」がオープンした。屋上ビアガーデンの第1号である。東京や名古屋でもビアガーデンが復活する。7月、厚生省が、食生活改善運動を提唱し、「栄養

改善普及会」を設立した。9月1日、森永製菓が、学校給食用のビタミン強化スूपを6大都市で発売した。9月14日、農林省が、凶作による米不足（この年の産米824万トン）の対策として、170万トンの外米を輸入した。しかしトン当たり価格が200ドル以上と割高なため、さらに外貨事情の逼迫のため、輸入が制限された。代わりに小麦の輸入が増大し、1955（昭和30）年には200万トンを突破した。都会では3度に1度はパン食になった。政府は、人造米奨励に乗り出す。10月、栄養米が登場した。1kg 80円（白米68円）であった。

（3）住 宅

1月8日、東京都が、住宅建設資金の貸付を始める。7月、東京都建築局が、戦前からの都営住宅870余戸の、不公平であった家賃を平均2倍に値上げした。9月30日、都営住宅の抽選がおこなわれた。競争率は、1,000倍であった。10月、メゾネット型都営住宅第1号が、東京の江東区亀戸町で着工された。10月、寿屋が、赤玉ポートワインで住宅が当たる特売を実施した。住宅の洋風化で、カーテンの需要が増大した。

（4）ファッション

3月12日、群是製糸（現在のグンゼ）が、シームレス靴下の製造を開始する。（この年の流行語が、「戦後強くなったのは女と靴下」である。）4月、ミシンの生産が150万台を突破した。6月、中折れ帽子が戦後の最盛期を迎える。7月16日、アメリカでのミス・ユニバース審査会で、日本代表の伊東絹子が第3位になった。その影響で、「八頭身美人」が流行語となる。日本女性のスタイルが世界に通用することを証明し、若い女性が溜飲を下げたのである。ラジオドラマ『君の名は』が映画化され、総興行収入9億9,000万円を記録する大ヒットになった。その影響で、秋から冬にかけて、「真知子巻き」がブームになる。10月、大丸が、クリスチャン・ディオールと独占契約し、東京、大阪、京都、神戸で、豪華なショーを開催した。11月24日、ニュー・ファッションをひっさげて、ディオール専属モデルの一行12人が初来日した。翌日、東京の丸の内の東京会館でディオール・ショーが開かれる。「チューリップライン」を発表した。帝国ホテルで開かれたショーの前売り券が、高額にもかかわらず、2、3倍のプレミアがつくほどの、ディオール人気であった。これ以後、以前にもましてディオール旋風が吹き荒れた。昭和20年代、日本女性にとり、クリスチャン・ディオールの服を着ることは、まさにステータス・シンボルであった。この年、下着ショーが盛んになり、ペチコートやブラジャーがもてはやされた。第1次下着ブームが起こった。この年、婦人服のイージーオーダーが始まる。紳士服に遅れること4年であった。プリンセスラインの婦人服、透明なナイロンブラウス、婦人用レース手袋、アメリカ帽子、ゴム織り素材で50～60cmの幅広のシンチベルト、ゴム底とビニール皮とを接着し

たビニールシューズが流行した。12月、ポーラ化粧品が、移動美容室を新設し、全国巡回美容サービスを開始した。（来年から飛び込み販売もするようになった。）

（5）音 楽

織井茂子が歌う『君の名は』が、映画のヒットとともに人気を博した。雪村いずみが『思いでのワルツ』、『はるかなる山の呼び声』をヒットさせ、大スターとなった。美空ひばり、江利チエミとの三人娘時代の到来である。12月31日、NHKが、「紅白歌合戦」の公開放送を初めておこなう。民放6局も「ゆく年来る年」をスタートさせ、大晦日の舞台がそろふことになる。

（6）本

原作である菊田一夫著『君の名は』も47万部売れ、ベストセラーとなる。不滅のロングセラー『光ほのかに——アンネの日記』が第5位にランキングされた。『現代世界文学全集』も売れた。

（7）まとめ

スターリン暴落があったが、投資景気の年であった。またこの年は電化元年の年と言われた。各種電化製品、特にテレビ、洗濯機、冷蔵庫という三種の神器が豊かさの象徴であった。月収の数倍の高嶺の花であったが、憧れの対象であった豊かなアメリカの生活の模倣が、電化製品の分野でも始まろうとしている。それも隣が買ったからうちも買わねばという、他人指向型の豊かさ追求であった。皆が真知子巻きをするので私としたのである。皆が憧れるから、私もディオールに憧れたのである。皆のアイドルとして三人娘が人気を博した。皆が『文学全集』を買った。豊かさは他人の模倣で実現した。スーパーマーケットが生まれた。貧しさもあった。米は不作で、栄養米までつくられた。貧困による長期欠席児童は30万人近くいた。都営住宅の競争率は1,000倍であった。水俣病が起こりだした。ゴミ問題も起こりは始めている。アメリカへの憧れの裏に潜むルサンチマンという感情が、力道山を応援させた。明暗両面の豊かさ意識があらわれた年である。

11. 1954（昭和29）年

（1）政経、その他

1月2日、二重橋事件が起きる。皇居一般参賀に38万人余が集まったが、二重橋上で将棋倒しが起こり、17人が圧死、75人が重軽傷をおった。1月6日、国鉄は、青函海底隧道の起工式をおこなう。（1988（昭和63）年3月13日、青函トンネルは開通する。）1月20日、戦後初の地下鉄、丸の内線の池袋―御茶ノ水間6.6kmが開業する。1月、建設省が、全国の主要道路27,702

kmを指定した。3月4日、関門国道トンネルが開通した。2月2日、日航が初の国際線、東京―サンフランシスコ間線の運行を開始した。日本人パイロット2人も搭乗していた。4月20日、日比谷公園で第1回全日本自動車ショーが開催され、54万人が集まった。高嶺の花の自動車より、手頃なオート3輪やオートバイに人気が集まった。（この年バイクモーターが急激に増加し、スクーターより生産台数が多くなる。バイクモーター54,720台、スクーター48,732台であった。自動車熱も起ころうとしている。社会生活テンポが早くなり、時間の効率化のために購入するようになったのである。）5月20日、総額2,600億円の第1次道路整備5ヶ年計画を決定した。10月1日、日光のいろは坂が開通した。10月23日、日航の国内線に戦後初の日本人機長が誕生した。陸上道路の整備と空の運行の整備が着実に進展している。航空機利用者数も、1951（昭和26）年44,853人から、この年の269,742人と急増している。2月1日、マリリン・モンローが来日する。ブームを引き起こす。同日、町村合併が始まる。3月末までに、35市が誕生した。2月19日、東京の蔵前国技館でわが国初の国際プロレス大会が開かれる。タッグマッチで力道山・木村組がシャープ兄弟に挑戦した。NHKと日本テレビが実況中継した。力道山は、街頭テレビ時代のヒーローだった。「空手チョップ」が流行した。11月19日、蔵前国技館で初の世界女子プロレス大会が開かれた。4月、ベビーブームで、小学校の新入生が前年より100万人増加した。7月11日、日本文化放送（現在の文化放送）が、午前2時までの深夜放送を初めて開始した。夏、三菱電機が、ルームエアコンを発売する。9月16日、日本中央競馬界が発足した。初年度売り上げは1,120万円・入場者170万人であった。（売り上げは急増し、1987（昭和62）年は、売り上げ1兆9,700億円・入場者800万人になった。）9月、ブリジストンタイヤが乗用車用チューブレスタイヤの製造を開始した。12月に発売になり人気を博した。10月20日、大丸が、東京八重洲口に、地下2階・地上6階のデパートをオープンさせた。12月11日、公務員のゴルフや麻雀などが禁止された。12月、日野自動車が、国産最大の12トンダンプを製造した。佐久間ダム工事で活躍することになる。この年の1～3月期の金融引き締めが前年度以上に強化された。全国銀行の貸し出し純増は、前年比44.3%の急減であった。この年の一般会計も前年度を200億円下回る9,995億円であった。その結果1月から10ヶ月間の景気後退が続き、11月が谷となった。GNP、在庫投資、民間設備投資は、前年より増加率が落ちたが、個人消費だけが前年度比4,169億円の増加であった。不況下のなか、消費だけが下方硬直性を示した。11月から1958（昭和33）年6月まで、有史以来の未曾有の景気という意味の神武景気が起こる。この年、美人コンクールが流行する。

（2）食料

1月、武田薬品が、ビタミンB₁強化白米「ビタライス」を発売した。2月26日、明治乳業、

明治製菓、東洋製罐の共同出資で、わが国初のパン量産会社「明治パン」が設立された。3月、武田薬品が、「アリナミン」を発売する。総合ビタミン剤の生産量は、1951（昭和26）年1億6,836万錠から、毎年増大しこの年には5億553万錠に達した。4月28日、明治製菓が、わが国初の缶ジュース「明治オレンジジュース」を発売した。「キリンジュース」、「タカラボンジュース」も売り出された。名糖産業は、初の粉末ジュースを発売する。ビン詰めのように中身の見えない缶ジュースを定着させるには、1957（昭和32）年1月17日の「天然オレンジジュース」の発売まで3年かかった。割れなくて、持ち運びができる缶ジュース革命の嚆矢がこれであった。ジュース消費金額も、1951（昭和26）年12億円、この年18億円、翌年30億円と確実に増加した。6月3日、学校給食法が成立した。児童・生徒の心身の健全な発達と国民の食生活改善を目的としている。米食偏重からパンへと食生活を転換させるために、まず児童からパンに慣れさせる目的である。（1976（昭和51）年から、余剰米の消費のため米食給食が導入される。）6月4日、前年度の凶作のため、通産・農林両省が、戦後初めて中国産米5,500トンの輸入を決定した。外米輸入も1,433,283トン、年間一人当たり16.2kgと、この年ピークを記録した。一方、外米の配給辞退者も続出した。7月30日、政府は、黄変米の混入率を下げて配給を強行した。8月14日、毒性をめぐって消費者団体が猛反対したため、厚相が配給中止の声明を発表する。11月、米の配給日数が、来年から一律1ヶ月15日と決められる。米のヤミ依存度は、1951（昭和26）年23.2%が、この年は39.8%と増大している。米食と比べるとかなり割高（1955年調査では、100cal当たり米食では3.72円、パン食4.99円であった）であるが、パン食が増加している。（昭和31年度国民生活白書、13頁参照）『ローマの休日』の影響で、アイスクリームがよく売れた。ストロベリーやコーヒーを入れたアイスなど、種類も増えた。

（3）住 宅

3月6日、日本住宅協会と主婦連が、住宅相談所を開設した。4月、東京都が、簡易耐火構造の平屋建て都営住宅56戸を着工した。以後、この住宅は、木造に代わるものとして大量に建設された。5月1日、住宅金融公庫が、分譲住宅や宅地取得造成などへの貸付を始める。5月20日、土地区画整理法が公布された。6月、『住宅白書』のなかで、都市1人平均3.2畳と発表された。11月、政府は、住宅難の折から「門松はやめましょう」という運動を推進する。門松だけで、13万戸の家が建つという。この年、プロパンガスが全国で発売され、台所に革命をもたらした。12月10日、鳩山一郎内閣が誕生した。内政のトップに、住宅問題を揚げた初の内閣であった。サンウエーブが、ステンレス薄板溶接によるステンレス流し台を開発した。政府は住宅建設に力を注ぎ、毎年10万戸内外の建設を推進し、民間の自力によっても20万戸内外が建設されてきた。しかし風水害、火災、震災等による損失も多くでた。1951（昭和26）年の総坪数3億1,149万坪、

1人当たり坪数3.73坪、この年はそれぞれ3億2,264万坪、3.71坪と減少している。翌年も減少し、住宅不足数は278万戸で、そのうち学校、倉庫その他の住宅以外の建物に住んでいる者や同居している者が81万戸、9畳未満の家で1人当たり2.5畳という狭小で過密居住をしている者が77万世帯にのぼっている。家賃も、建築費が高騰しているので依然上昇傾向にある。（昭和31年国民生活白書、34頁参照）まだまだ住宅事情は緩和していない。

（4）ファッション

2月、クリスチャン・ディオールが、「Sライン」（鈴蘭ライン）を発売した。8月、「Hライン」を発売した。10月、大阪、京都、神戸の大丸で、ディオール・サロンを開設した。3月10日、東京の丸の内の東京会館で、「春から夏へのモード婦人靴発表」が開催された。靴の初のファッションショーであった。合成底の靴が脚光を浴びる。3月、櫛山商店（現在のオンワード櫛山）が、背広のイージーオーダーを始める。銀幕のスターを真似たファッションが大流行した。前年の『ローマの休日』（4月封切り）、本年の『麗しのサブリナ』が公開されると、オードリー・ヘップバーンの人気もりあがった。太い角形の眉にシャープなアイラインの化粧、前髪を垂らした短い髪型（ヘップバーン・カット）をした女性が、トレアドル・パンツ（戦後の日本女性にスラックスを定着させた）やサブリナ・シューズをはき、ソフトクリームを片手に街を闊歩する姿があふれた。以後、女性にマンボとシャツという男っぽいスタイルが流行する。M（男）+W（女）時代と呼ばれた。来るべき高度成長を予想させる女性のたくましさを演出している。（化粧品のブランド史、114頁参照）夏、水着の上から締める、白い海水バンドが登場した。脱毛クリームや落ちない口紅なども流行した。美人コンクールも流行した。

（5）音楽

2年前にデビューした春日八郎の歌う『お富さん』が、歌舞伎ファンからの大反発にもかかわらず、80万枚もの売りあげを記録し、大ヒットになった。またこの年は三人娘がそれぞれヒットをとばし、三人娘が歌謡界を席卷した。歌謡界の担い手が、戦前・戦中の歌手が影を潜め、代わりに三人娘などの戦後派の歌手が活躍するようになった。歌謡界は早やばやと「もはや戦後ではない」といわれるようになったのである。

（6）本

伊藤整の『女性に関する十二章』が、読者の支持を得て、彼の著書が次々と刊行され、伊藤整のブームが起きた。この本は、後の新書ブームの口火となるものであった。12月『文芸春秋臨時増刊号・漫画読本』が、文芸春秋から創刊された。（1958（昭和33）年から月刊となる。）戦後

第2次漫画ブームの火付け役となる。竹内つなよしの『赤銅鈴之助』の人気の高まる。（1956（昭和31）年ラジオドラマ化，翌年映画化された。）

（7）まとめ

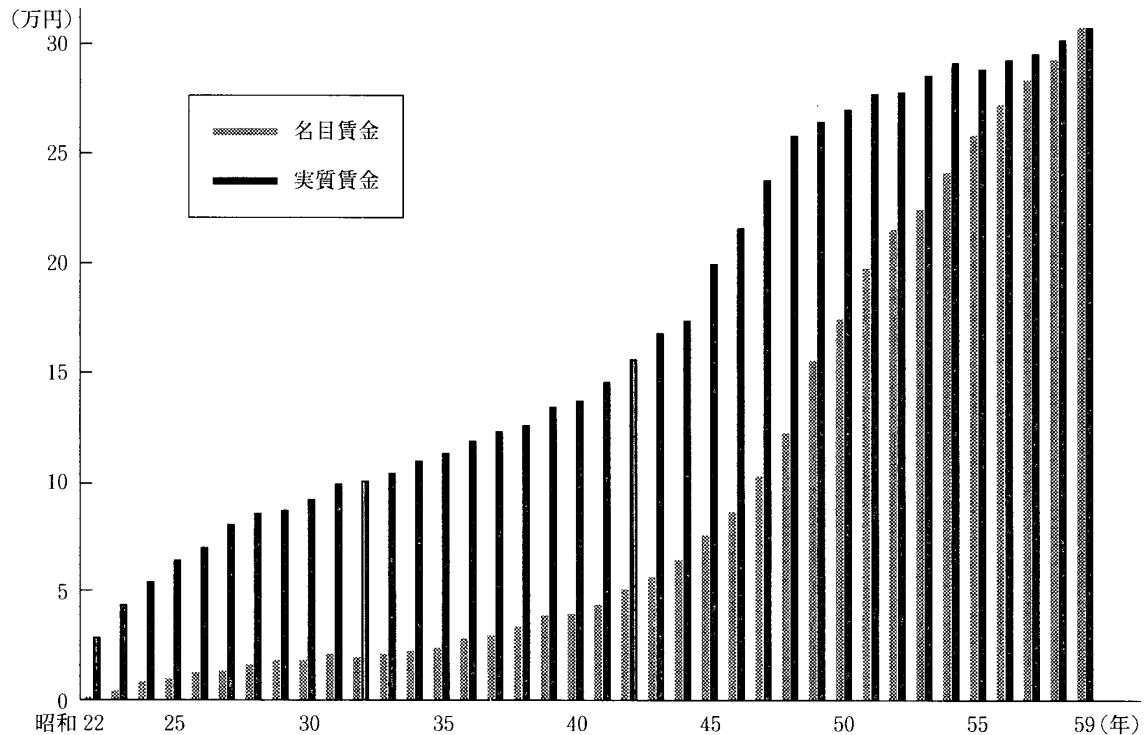
11月から始まる神武景気までは、不況下の状態である。しかし消費は拡大している。道路交通網の整備は着実に進んでいる。凶作のなか外米の辞退者まででる。都市部では1人当たり3.2畳まで増大した。プロパンガスも普及している。皆が同じように三種の神器に豊かさを重ねている。ディオール旋風がまだ吹いている。オードリー・ヘップバーンの髪型やファッションが流行する。マンガブームも起きた。歌謡界では、経済界より2年早く「もはや戦後ではない」といわれる。だが、有毒米を辞退したので、ヤミ米を買わねばならない。住宅不足も拡大している。豊かさは遠い。しかしやがて高度成長下のあふれるような豊かな時代がやってこようとしている。

12. 10年間のまとめ

戦後、日本人は豊かさを求め続けてきた。豊かになりたいと意識し続けてきた。その豊かさ意識は、認識の表面にある明るく・合理的な感情とその裏にある暗く・非合理的な感情が、共時的・通時的に絡まり合い成立するものである。簡単に割り切れるものではない。ましてやグラフや表に表すことはできないものである。だからこそ政経、食料、ファッションなどの項目に分け、詳しく見てきた。しかし10年間のまとめをするために、あえて表やグラフの説明から始めることからする。豊かさを実現する重要な手段として所得がある。それも将来確実に増加するような所得を見ていかなければならない。名目賃金と実質賃金を、1947（昭和22）年から1984（昭和59）年まで見ていく。これが図1である。賃金は毎年確実に増大した。だから家計の消費水準も着実に増加した。これが図2である。（両図は、『昭和60年度国民生活白書』，経済企画庁編，111頁，119頁を参照した。）1928（昭和23）年～1954（昭和29）年平均で実質賃金は16%と高い上昇率を示し、勤労者世帯の消費支出も実質で6.8%と高い伸びを示した。次に28都市の家計の消費構造の変化を見てみよう。これが表1である。（『昭和31年度家計調査年報』，総理府統計局編を参照）食料費が毎年減少し、その減少部分を被服費と雑貨が吸収する。被服費は1952（昭和27）年まで少しずつ上昇したが、翌年被服費の価格低下により減少しだす。被服や住宅など、生活の洋風化のため、雑貨は毎年増大した。これが表と図から言えることである。では図や表では表されない、10年間の豊かさに関する意識を解明していこう。

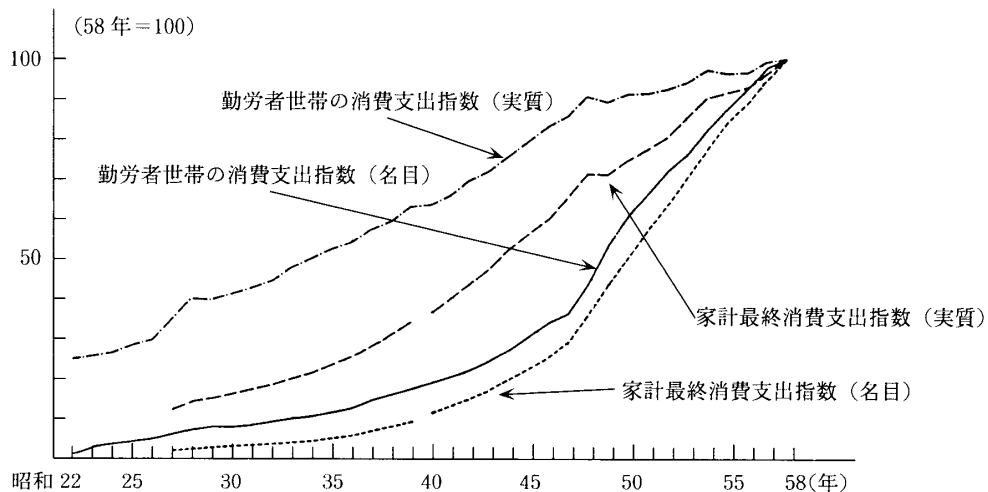
終戦から1954（昭和29）年まで、日本人はまず食に豊かさの対象を向けてきた。戦後の9年間、エンゲル係数は50%以上であった。「どうにかして食べていく」ことが最大の生活意識であ

図1 賃金は毎年増加した（昭和60年度国民生活白書，111頁）



- （備考） 1. 労働省「毎月勤労統計調査」，総務庁「消費者物価指数」による。
 2. サービス業を除く事業所規模30人以上の常用労働者の平均賃金（現金給与総額）。なお，名目値，実質値ともに賃金指数（55年＝100）により59年値をもって実額換算したもの。ただし，26年以前は実額を採用。

図2 家計の消費水準は着実に増加した（昭和60年度国民生活白書，119頁）



- （備考） 1. 経済企画庁「国民経済計算」，「国民所得統計」，総務庁「家計調査」，「消費実態調査」による。
 2. 勤労者世帯の消費支出は37年までは全国全都市，38年以降は人口5万以上の都市。ただし，27年以前は全世帯。
 3. 家計最終消費支出には個人企業を含む。また，39年以前と以後では連続しない。

表1 戦後10年間の消費構造の変化（昭和31年度家計調査年報より作成）

（単位％）

	消費支出 (1ヶ月平均)	飲食費	被服費	光熱費	住居費	雑費
戦前(1934~36)年	81	35.8	11.5	4.9	16.6	31.0
1947(昭和22)年	4,684	63.0	10.3	4.5	4.3	17.9
1948(昭和23)年	8,780	60.4	11.3	4.5	4.2	19.6
1949(昭和24)年	11,885	60.0	10.8	4.2	4.7	20.3
1950(昭和25)年	11,980	57.4	12.3	5.0	4.6	20.7
1951(昭和26)年	14,389	54.4	13.6	5.2	4.5	22.3
1952(昭和27)年	17,838	51.2	14.5	5.5	4.8	24.0
1953(昭和28)年	21,304	50.5	13.5	5.6	5.3	25.1
1954(昭和29)年	22,654	50.9	12.0	5.5	5.4	26.3
1955(昭和30)年	23,497	48.7	12.0	5.3	5.8	28.2

り、食べることで豊かさを充足してきた。ヤミ市での購入やタケノコ生活でかろうじて死なずにすんだ。配給の食料は不足しているうえに、たびたび遅配した。激しいインフレにより米の値段は、ヤミ値も公定価格も騰貴し続けた。（豊作の年に下落したこともあった。）外国から小麦粉、脱脂粉乳などの多大の援助を受けた。ぼそぼそして、粘りけのない外国米を大量に輸入して、食べた。不足している米に代わり、パン食が奨励された。文化天火で固いパンを焼いて食べた。小平事件、山口判事餓死事件、寿産院事件など、食にまつわる悲惨な事件も起きた。それでも1948年にはカボチャの人气が急落し、大量の滞貨が発生した。戦時中から食べ続けてきたカボチャへの怨念が爆発したのである。（今でもカボチャは見るのも嫌いという高齢者が多い。）増量した新米の配給に舌づつみをうったこともある。松ヤニとビニールとサッカリンのガムに一時の安らぎを得たこともある。ミルクキャラメルやチョコレートの甘味に幸せを感じたこともある。買い出しもなくなり、逆に行商のおばさんが自宅まで売りに来てくれる便利さを味わうようになった。中元や歳暮で食料を送る喜びと、受け取る幸せを再確認した。サイダーやラムネでなく、味も良く、健康にも良いジュースを飲むようになった。鯨の肉でステーキ、魚肉ソーセージでハムを食べた気分になった。（主食と非主食の割合は、年々非主食の割合が相対的に高くなっている。1947（昭和22）年25.1％と35.3％が1954（昭和29）年18.2％と30.3％となっている。）密造酒でなく、トリスバーでひとときの憩いを体験するようになった。女性までもが、ビヤホールで乾杯をした。少しずつ食料事情は改善されていく。豊かさは実現しようとしている。しかし1952（昭和27）年と1954（昭和29）年に黄変米の外米を有害であるとして、辞退することもあった。児童の体位は向上したが、必要カロリーは不足している。特に動物タンパク質が大幅に不足して

いる。（アメリカの3分の1である。）米のヤミ依存度は増加して、昭和30年には40%に達している。豊かさを実現してくれる、豊富でおいしく、かつ安全な食料はまだ確保されていない。

住宅に関しても豊かさは実現していなかった。終戦時は420万戸不足していた。焼け出された人々で、防空壕やバス、電車で住めればまだ豊かであった。住む所のない引揚げ者が、学校などを占拠する事件がたびたび起きた。雨露を防ぎ、凍え死なないための住居が絶対的に不足していた。民間自力の住宅建設、公営の住宅建設、住宅金融公庫の融資による住宅建設などで、住宅戸数は増大していった。1945年235,800戸、1946年459,300戸、1947年626,100戸、1948年740,900戸、1949年370,100戸、1950年337,300戸、1951年246,300戸、1952年272,800戸、1953年310,700戸、1954年278,400戸、1955年420,000戸と増大している。（6割以上が民間自力の住宅である。昭和31年度国民生活白書、37頁参照）設備の整った公営住宅の競争率は、家賃が高額にもかかわらず数百倍である。建設費の高騰で家賃も高騰し続けている。節穴だらけの床やゆがんだ壁など、欠陥住宅でも、家さえあれば豊かであった。風水害や地震、火事などで、住めなくなった住宅も続出した。だが、住宅の近代化・洋風化は着実に進んでいる。板敷きの洋間、食事と就寝を分離した間取り、DK、耐火構造、高層住宅などが建てられていく。それにともない調度品の洋風化も進む。カーテンやカーペットの需要が拡大する。しかし1955（昭和30）年で278,000戸の住宅不足である。倉庫や学校など住宅以外の建物に住んでいる世帯が81万世帯もある。1人当たりの畳数も、都市部では3.2畳である。住宅建設の方向付けはできた。しかし高すぎる住宅、狭い家、欠陥が目立つ住宅内部。豊かさを実現する住宅は、まだ手にしていない。

ファッションの分野では、終戦直後から新しい豊かさを次々に追求している。ファッションは、人間の存在にかかわるものである。ファッションは、着る人のアイデンティティを伝えるコミュニケーションの道具である。多様な自己を、様々なファッションを通して表現し、他人に伝える方法である。ファッションは、自分を多数化してみせる終わりなき遊技である。（ファッションの文化社会学、ジョアン・フィンケルシュウタイン、成実弘至訳、54頁参照。ファッションの技法、山田登世子、163頁参照）終戦直後、食うや食わずでも、今まで禁止されてきた華やかな柄物の着物や赤い口紅を、押入の奥から出して身につけた。次に日本人女性は、タケノコ生活のなか、アメリカ人のファッションを模倣し自分をアメリカ人のように見せようとした。年代順に並べてみよう。和装を洋装に、モンペをスカートに代えた。洋装への変化で、化粧やアクセサリなどの身の回りのものも洋装化した。最初は安くて、小さい、ヘアピンやリボンなどを身につけることで満足していた。だんだんエスカレートしていった。広告がファッションのエスカレートを促した。資生堂は、高校生にも化粧の楽しさを教えていった。ポーラ化粧品は、セルスカーで地方の自宅まで押しかけた。パーマントをかけ、赤い口紅を引き、肩パットを付け、太いベルトを付け、ハイヒールを履くようになった。スタイルブックを参考に、貸し出されたミシンで、

アメリカン・ファッションを模倣し、男のズボンをスラックスに縫い直した。手編みでセーターをつくった。学校に行ってファッションを勉強した。ファッションショーも開かれた。華麗なるディオール・モードに魅了された。アメリカ人のようなグラマーになりたくて、天然ゴムのバスト・パットやブラパットをつけた。アロハシャツと色眼鏡が流行した。クリーム、おしろい、口紅、頬紅、爪紅、アイメイクなどの化粧品も売れた。映画の影響で、赤い靴が流行する。ナイロン・ストッキングが流行する。男性もファッションに目覚め、雑誌を読む。腕時計が男女ともに売れた。下着ショーが開かれ、下着ブームが起こる。見えない下着までおしゃれするようになる。生地を多く使うプリーツスカートが人気になる。透けるナイロンブラウスが流行する。極めつけが「真知子巻き」と「ヘップバーンモード」である。特に女性は、次々と新しいファッションを追い求め、たくましく自己を主張していった。美人コンクールに熱狂し、八頭身美人に憧れた。他方、新日本髪が考案されたり、着物だけのファッションショーが開かれたり、和装の魅力も忘れられていなかった。たとえ食料や住宅が不足していても、多様な自己を様々なファッションで表現する豊かさの追求は、止めることができないのである。

この時期のファッションをたくましく引っ張っていったのは、主に大人の女性であった。次の時期から若者が参加してくる。その嚆矢が「日大ギャング事件」である。犯人は、アメリカ人のような高級ファッションを買いだめするために犯行をおこない、２日後ファッション雑誌に掲載されているようなファッションに身を包んだまま逮捕された。若者が、自分の感性だけで、大人の分からない新しいファッションを身につける時代を開いていくことになる。さらに後には、この時期に生まれた団塊の世代が、独自の豊さ意識をファッション界で実現していくことになる。

音楽は、人々に希望と明るさをもたらし、心を豊かにしてくれた。焼け跡に『リンゴの唄』が響き、絶望に打ちひしがれた人々に、明日への希望を抱かせた。元気いっぱいのブギウギ節を聞くことで、疲れ果てた体に活力を注入された。アイドル三人娘の歌声に、悩みを忘れた。英語混じりの音楽や洋もののレコードを聞き、外国気分を味わった。反対に『お富さん』や演歌で日本人であることを確認した。NHKの紅白歌合戦を応援し、正月気分につけた。だが音楽は情念の発露でもある。暗い恨み節の『星の流れに』や桃色演歌が流行した。歌うことで恨みを発散し、気分を高揚させたのである。音楽の分野でも、明るさ、近代性という面が表面にでているが、裏では暗さ、非近代性などのどろどろとした面が流れている。２つの相反する性格が合わさって、音楽の豊かさを作り上げていったのである。

本の世界では、戦争物が反響を呼んだ。これだけの苦みを与えた戦争は何だったのかという疑問から、『旋風二十年』、『俘虜記』、『潜行三千里』、『きけわだつみの声』などが売れた。過去を反省することは、将来の豊かさを実現するための必要な手段である。婦人の力が強くなるにしたがい婦人雑誌も多く出版された。『君の名は』でのすれ違いの場面で涙を絞った。伊藤整ブーム

も起こった。『日米会話手帳』が戦後初のベストセラーであった。アメリカへの憧れが買わせたのである。アメリカへの憧れが、日本文化否定につながった。『墮落論』や『日本文化の家族的構成』などで、日本社会・文化の非近代性が強調される。アメリカとの比較で、日本が否定され、そこから新たな再生が豊かに生まれるのである。滅びゆく貴族をわが身に顧みて『斜陽』に共感を抱いた。源氏鶏太のサラリーマン小説は、重役を夢見て頑張っている会社員を励ました。漫画界もブームを引き起こしていた。『少年』、アメリカ漫画を真似た『コドモ漫画』など健全な漫画と、不健全と非難されていた赤本マンガが両方とも売れたのである。子供にとり、両方の漫画ともおもしろいのである。一般雑誌の復刊・新刊ラッシュとともに、カストリ雑誌の氾濫もあった。本の世界でも、苦しみや非近代性の確認・反省という暗い面と、アメリカ英語を話せる、あるいは努力は報われ未来への展望が開かれるという明るい面が混じり合っているのである。

このように終戦から10年間、日本人は豊かさを求めて生きてきた。朝鮮特需で景気は向上し、消費・投資景気で豊かさは拡大しつつある。食料では少し改善された。だが安全で、豊かな食料は実現していない。住宅建設の方向付けはできた。だがまだまだ不足しているし、欠陥が多く、そのうえ高すぎる。ファッション界では、終わりのない豊かさを次々と求めている。音楽界では明るさと暗さを交差させながら、豊かさを味わっている。本の世界では、過去の非近代的日本の反省のうえに、豊かな日本の再生を問題提起している。この時期の日本人は、多様な豊かさを多方面から求めて生きていたのである。そして1954（昭和29）年から始まる神武景気が、三種の神器など家電の分野、さらに食料、住宅、ファッション、音楽などの分野で、沸々と沸き上がるような豊かさ意識を実現していくのである。